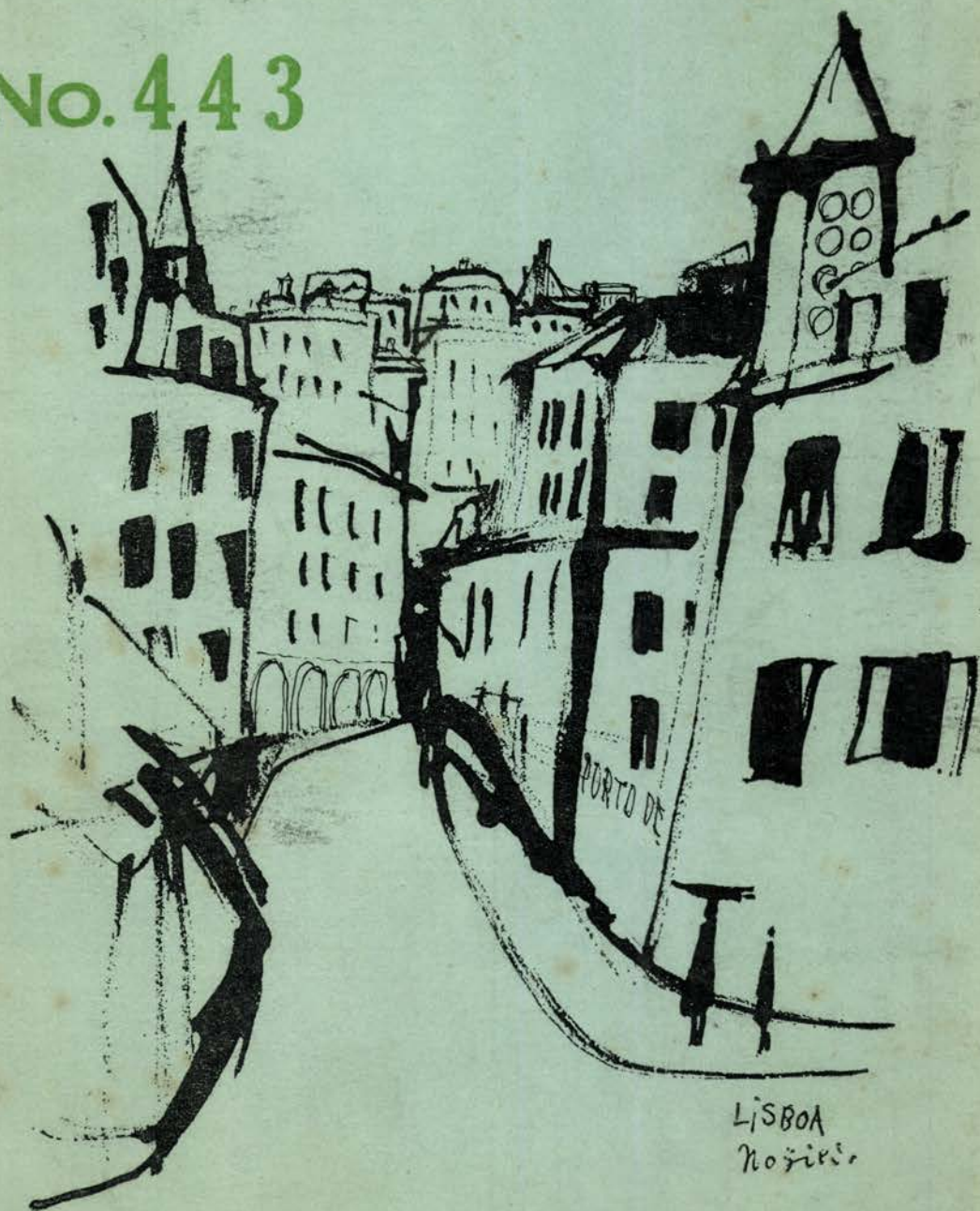


証の雑記

Pensoj flugas trans la land - limon THE SENRYU ZASSHI

No. 443

四月号



麻生路郎☆主宰



清酒
日本盛
ニホンサカリ

灘 西宮酒造 釀

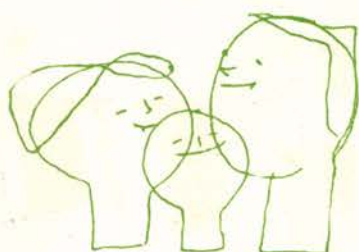
超特撰 (化粧ケース入) 一、八リットル詰・一、二〇〇円



えらばれ
みがきぬかれた
灘の酒
超特撰 日本盛



一家そろつてホーライ党



廣東料理 豚饅 焼売



大阪なんば・TEL (44) 551-2



国立公園 奥新和歌浦・雑賀崎

風光明媚な海岸美を誇る
国際観光旅館

うおまたろ
魚又楼

TEL 和歌山 ④ 0431・0387

不朽洞句帖

麻生路郎



敷かれてやるひまもなかりしに 金婚か
 金婚を借家住いのまま迎え
 恋の彼の女タイトルバックに吸いこまれ
 署の窓を漏れる灯だけの深夜にて
 地下センター幻の如く人がゆく
 人を待つてまんネ BGをととは言わず
 七十のおおなも媚を忘れざる
 パートタイム僅に若さとりもどし
 切れ風のように二号は放れゆく
 結婚せる若人に贈る(二句)
 ついて来いと言ひ切れよ 夫なりせば
 花嫁にうそ言わぬこと言わぬこと

川柳雑誌★四月号目次

不朽洞句帖	麻生路郎	(3)
川柳名句抄の鑑賞	麻生路郎	(32)
軍刀とこどもたち	東野大八	(12)
明治大正柳誌順礼	奥津啓一朗	(35)
川柳初編研究(三)		

丸十府・岡田甫
 川端柳風・高須啞三味・前田喜代人
 岡崎重義・清博美・藤井和雄

西島○丸の句と人柄など

短詩文学文庫に就いて

妻を語る

★続・川柳書架

金に繋がる話

柳志寸言

千代尼

詩的趣味

大万川柳「きもの」発表

新進作家を語る

不朽洞の人々

★

川柳塔

同舟近詠

近作柳櫛

金泥集

各地柳壇

★柳界展望

一路集

「一ト筋」
 「山の宿」
 「視線」
 松江梅里選
 山根白星選
 木村水洞選
 路郎生

★柳構室

題字：麻生路郎・表紙：野尻弘



麻生霞乃女史（阿部佐保氏撮影）

妻を語る

麻生路郎

作家の田山花袋氏は、六十を過ぎたら初恋の話を書いてもいいようなことを談されていたが、それは生々しさがなくなっているもので、読む方から言っても、淡々として読めるからであろう。

その意味から、私が妻のことを書いても、一つの物語として読んで貰えるのではなかろうか。

霞乃と私が大正三年の四月九日に結婚してから、この四月九日が来たら丁度五十年になる。五十年と言えば半世紀だ。しかも激しく移り変った世代であった。幾ら恋愛結婚にしても、飽きも飽かぬもせずに、よくも今日の日まで続いたものだ、自分でも呆れている。しかし振り返って見ると、続いた理由がないこともない。その当

時の私は肺炎を患っていたので、妻を娶るなら、第一は健康であること、第二は嫉妬心のないこと、第三は愛嬌のあることという三条件を目標にしていた。

自分が病人でありながら、妻の健康を第一条件にしたことは、今にして考えると、随分自分勝手な条件であるが、それには大きい理由があった。私の母が肺結核で私が生れて一年三カ月の時、郷里で道で亡くなった。その後大阪へ移った矢先へ私が帰ったのは十一才の小学三年の三月だったので船場尋常小学校の四年生に編入されたのであった。それから私はかなり厳格なおばあさん育ちで、母の愛情というものを知らず、学友の母から可愛がっては貰ったが、母の無い淋びしさを身をもって体験してい

たので、妻を持ったら、私の生きる限り、妻の命を護ってやろうと考えたのであった。

霞乃の母も、霞乃の六才の頃、肺結核で亡くなり、おばあさん育ちで、おばあさんが、まもなく亡くなってからは父と親一人子一人で育ったのである。父は渡辺霞亭の門下として歴史小説家を志し、霞亭の代作で新聞小説などを書いてしたが、経済がゆるさぬので、小学校の教員に転向し、傍ら数学を修め、一人娘の育つのを唯一の楽しみとされ、霞乃のためには父と母の二役で、小学校の頃には髪まで結うてもらったという話である。

霞乃が女学校へ行ってからも、入学から転校まで、一切父が面倒を見ていたし、週に一回は芝居を見せてもらったし、全く自由な生活をしていたそうである。

これは父、河盛蘆村が、堺市の素封家河仁の長男として生まれ、極端な封建制度にさいなまれ愛妻と共に家を棄てて苦勞をした反動で、娘には全くの自由主義を採ったからであった。芝居でも二人連れで出かけたそうだが、霞乃が歌舞伎が好きなのも父の感化で、殆んど見ない芝居はないほど見ている。西鶴物や近松物の戯曲を今でも暗誦出来るほど読み耽ったのも父の影響だと言われねばなるまい。そのくせ霞乃はミッシェンストール英文科で、セークスピアの戯曲や、テニソンやロングフエローなどの詩を研究していた。徒然草や土佐日記、十六夜日記、漢文の素読などは少女時代に父から教えられたそうだが。その父の蘆村は、その

頃正宗白鳥のファンであったので思想から言えば親子が逆だったのである。

私が蘆村にはじめて会ったのは、西田当百の二階で句会の晩だった。大正二年の頃のことである。若い女学生と並んで座っていたので、妹を連れて来たのだとばかり思っていたが、それが彼の娘であった。それはど彼は若く見えた。この娘が後に私の妻になろうなどとは夢にも思わなかった。句会に集まるのは多くて七、八人だった。五葉や半文銭・力好・常坊・水府などが常連だった。それらの人達は太抵亡くなった。今日まで作句を続けているのは水府と霞乃と私だけである。その時分の水府は今の重役タイプと違って、紅顔の美少年だった。この少年Aが後年「番傘」を背負うて立っとは夢にも思わなかった。それは霞乃と私が結婚したのと同じで、大阪の柳屋にとっても五十年の歳月は決して短くはなかったと思う。私は大正二年に、海外へ流出の許可願のため、東京から帰阪、姉の病気を看護しながら、川柳を削っていたので、霞乃との交際がはじまり、私が指導的立場で、ロシヤ文学の英訳本と一緒に研究したりした。霞乃は学校で英語の古典ばかりやっていたので、アップトゥデートの英語や思想的な文学は私に教わる立場にいた。斯うした交際からいつか、霞乃は私に魅力を持つようになり、私は霞乃を愛するようになったのである。彼の女は伝道の生涯に生きようとする意志を醸えて、私との結婚を受け入れることになった。

そこで私は霞乃の父に、妻にいたきた

いという手紙を出した。その返事は「さし上げないことはないが、条件があるので一度お越し願いたい」ということであつた。どんな条件があるのかと勇敢に出かけて行った。

父蘆村の注文というのは次の通りだつた。

「私は長い間、この娘一人を力に生きて来たが、娘さえ承知であれば差し上げてよろしい。しかし、一人娘をあなたに差しあげると私の家は絶家になる。それも差支えはないが、あなたの方の籍に入れることが出来ますか。それからもう一つ条件がある。私は今も言ったように、この娘一人を力に生きて来たので、今更女中において暮らす淋びしさには堪えられない。二人が結婚しても一緒に住ませてもらいたい。私は現在教職にあるので、経済の方は心配がないが、働けなくなったら面倒を見て欲しい。私の言いたいことはこれだけです」と言うことであつた。そこで私は

「籍の問題は私がすぐにも解決します。あなたと同居も結構です。若い二人より、少しでも早く世渡りに経験を持たれるあなたと一緒に暮らせることはいいことだと思います」

「それでは仲人はどうしますか」

「それは、あなたもご存じだし、私も親しい、西田当百に頼んで来ます」

ということで、この縁談はトントン拍子に運んだのであつた。二人が既に愛しあっていることは打ちあけなかったが、蘆村はそれと気づいてるようであつた。二人に顔を赤らめさせるようなことは言われなかった。

「当百はホンマかいな。担ぐのと違うか」

と、はじめは信じなかったが、「よし、承知した。しかし、うちの家内はそんな席へ出るのはいやだと言うがどうする？」

「じゃ、仲人は君一人でもいい、野合だと言われても困まるから、君をたのむんだから、結婚当夜の謡だけを君の名調子でやってもらえばよろしい。満一の場合は私の責任だ。君とこへ尻は持つて来ない」と言うことで芽出度し芽出度しと簡単な結婚式を挙げたが、籍を入れる難問題も一ト月のうちに解決、すべての約束を履行して、翌年には一人の姫を儲け、次々と、四男五女の親となり、四人の孫が出来て今日に及んでいるのだ。そして腹乃は九人の子どもを生んだ顔もしないで、年よりは若く見えますと言われている。

腹乃が娘時代に、河盛よしのの名で「みなみ」という短文を大正三年五月三日発行の「番傘」五号に発表しているから、抜萃して見よう。腹乃は結婚してからの雅号であり、本名はヨシノである。

忙しい／＼と口癖のように言うていながら、毎晩のように出掛けて行くのは道頓堀である。と言っても別に役者にヒイキがあるのでもなく、出雲屋の匂ひが殊更に好きだからと言うのでもない。とにかくあの辺をブラブラおねりのように行きかへりすることが好きである。

バーの白壁に高くかかっている赤銅のランターンや、前茶屋の板敷の大火鉢や、それを囲んだ舞妓の美しい、白い襟脚や、黒づんだ道頓堀川にうつるやわらかい灯の色などを見ているとかえることがいやになる。もし私が男だったら紙治ではないが魂ぬけてとほとと我家ながら高い敷居を越

えたでしよう。私は南向に寝なければおそわれる程宗右衛門町あたりや、道頓堀の憧憬者である。道頓堀と千日前は目と鼻の近きにあるけれど私は駄目箱のような千日前を歩くことを好まない。又あの活動写真小屋の無数の電燈は恰も安物の後橋に鍍めた新ダイアのようなものだ。そして千日と言えば掏摸を聯想する。花宗の葉玉の簪や水に濡れた法善寺の敷石道をひきづる下駄の音などは流石に忘れられぬが、私にはそれ以上千日を觀賞する力がない。

私は南へ行くと必ず橋屋で饅頭を買う。私の十二三の時は一個五厘だったが近頃一銭になった。値段のわりに味がよい。煙草屋の別嬪さんより難有い煙であると思つた。(原文のまま)

この一文を読むと、デカダン気分を多分に持って、自由に行動していたらしい。父が一切束縛をしないし、自由にお小遣を持たせていたのに、非行少女にもならなかったのはミッシェンスクールにいて、校長のミス・トリストラムさんの影響が非常に大きく働いていたものと思われる。

私は腹乃に誘われて、この学校の卒業式の余興に演壇で落語を一席ブツたことがある。勿論外人の先生たちには理解し得られなかったことと思うが、女学生のボーイフレンドに、自由にやらせるものもやらせるものだが、平気でやったものもなかなかの心臓だと言わねばならない。その時の私はフロックコートを着用におよんで真面目くさって落語をやったんだから滑稽である。今だったらそんな勇氣を持ち合わさない。腹乃はシェークスピア劇の主役の長セリフを少しも淀まずにやってのけたので、さすがだと思つた。

(続く)

明日を勝ちとる

細胞に飛びこむ活力剤



大日本製薬

ヘルタス

L-アスパラギン酸塩製剤

ヘルタスは高単位剤(150mg)です 30錠 350円・60錠 600円・150錠 1,300円

サンプル・説明書贈呈 大阪市東区道修町 大日本製薬株式会社(ヘルタス係)



新発売



川柳塔

麻生路郎選

若さはいいなウインク一つにも
不便さは足袋に右足左足

風邪臥床

臥ておれば仕事の山が目には迫り
寝たばこの火事はコップの水で消し

大阪市 北川 春 巢

右えならえして影までがお辞儀をし

もう帰るトイレを借りる女客

親の愛その上コネまでつけておき

まだもろてくれず長男二十八

初孫は定石通り女の子

大阪市 市場 没食子

お茶漬でいいと逢いにゆくつもり

手形落せいや落せぬと三通話

大口の債権者として上座

尾ひれつけて陰口かえって来

うしろ見せ待っているらしい女

芸者一代私生児だけ遣し

大阪市 土井 文 蝶

大阪市 正本 水 客

入院手術

ドクターはメス一筋の誇り持ち

育ち盛り済んで我子が恐くなり

ボーリング若い力がほとばしり

人手不足金の力も無に等し

時差出勤帰りの遅いパパとなり

暖冬異変脱いだオーバーを邪魔にされ

集団就職小企業を素通りし

大阪府 川村 好 郎

南天の雪はつ春の庭にする

高槻市 若柳 潮 花

連れ添えば恋にはうといひとになり

人情のかけらを拾うて起ちあがり

待たされる女柳の芽を見つけ

ハワイ 羽佐 間 柳 葉

冷静に還れば俺の短気から

甘言の裏に野心の眼が光る

先輩と云う事だけの高姿勢

堺市 吉田 圭 井 堂

頑固対頑固利害を考えず

うちの子の月給へもう税がつき

胸つき八丁やでと受験の子をさとし

お銚子を九谷にかえてムード変え

鴨すきの観光バスへ気が揃い

ホノルル 築山 快 夢 起

頂戴品二度のつとめとすぐ分り

姉妹都市地図さがしても見当らず

文化財らしく刻んだ顔の皺

孫にまで財布の空を見破られ

有難いありがたいただの仕事ばかりして

兵庫県 小西 無 鬼

炭一つつけぬ男で社長なり



留男から末男拾男でまだ続き

防府市 長野 井蛙

冬の北海道

冬に来て内地の人といったわられ

倉敷市 木村 千容

読み馴れたお札が人を眩惑し
惜しまれるうちにと因果ふくめられ

岡山県 直原 七面山

キッスを終えて元の歩巾に

旅費は女将が持った旅

倉敷市 田垣 方大

余生とはにわとりを飼う元署長

刑務所の門真人間の顔が出る

外燈のなにを照らさんあてもなく

口説く用意の巻タバコ出す

仕事着の方がきれいな村娘

加賀市 野村 味平

雲一つなき日のデイトなり

思い出の中で巾とる亡娘の笑顔

盃を持つ手も枯れて喜寿の席

鳥取市 河村 日満

成人式にて

貼り紙を無視米賓のどれも喫い

乾杯のあとばんざいで追いかえし

県へ陳情して

税金で建つ知事室の豪勢さ

豊中市 足立 春雄

肺癌がどうであろうと火をつける

無機物になった遺骸へ取りすがり

声帯模写自分の声を見失ない

豆腐ならは庖丁研がずとも切られ

焼き芋の包忘れてそれっ切り

大阪市 福井 野迷路

ブルトージャー史跡も出土もあらばこそ

思うことずばり子供は羨まし

肩たたく孫がベッドをきしませる

奈良県 麻生 アート

遅しくブラジルの夢持ち帰り

点き難いライター俺に相応しく

その時はアリバイ立たぬ程忘れ

出雲市 尼 緑之助

ニュースとは不快指数へつかかる

馬鹿にしても薬に又頼り

大阪市 水谷 竹荘

事故なんか気にしませんと旅行好き

方言をテープに入れて旅帰り

下関市 桜川 不水

歯が抜ける様に老友消えてゆく

柳井市 弘津 柳麿

自家用車一家悲惨な事故となり

大臣になって国会が恐くなり

寝たばこでしばらく今日を振り返り

加賀市 那谷 光郎

米子市 小西 雄々

遭難へ山は神秘と言うとれず

雪降れば降ったで子供に金がいり

冬山を炬燵で仰ぎ寒うなり

信男を無視してまでも儲ける気

京都市 大鶴 喜由

好意ありと見て女こき使い

はよ嫁に行きたい気持ちで居えつつ

片思いさせた娘今じゃ有難し

人と人何かの欲でつなぎ止め

東京都 山根 白星

顔の傷役者の意地の不退転

夕刊の子にガラス戸の水蒸気

遺作展妖気の思い当るふし

正義派の溜りがちな下宿代

お迎えの日まで女難は一度のみ

ドヤ街の酎をあがなうビール瓶

奈良県 飯降 白香

高度経済成長姿なき殺人がふえ

奈良県 西辻 竹青

やけくそになっても居れず決算期

結局はのまただけが損となり

岡山県 服部 十九平

娘の靴の尖りが父の勘にふれ

借金が払えず被告のように聞く

巨星墜つ株値ちよっぴり敬用す

尼崎市 長谷川 三司

配膳へこの病院のアンケート

ベットきよう髭剃りのお湯を妻が持ち

西宮市 若林 草右

たまさかの雪東海道もう不通

社長秘書喫まぬライター持ち歩き

高槻市 山田 季賛

上役を上手に使う事にする

その中にボスの子がおりとめられ

岡山県 田村 藤波

隣りとは所得の格差で壁が出来

ききなりの悪さ許すの許さぬの

児島市 本田 恵二朗

始末書で許されました苦笑い

恭仇の負けても笑うにくらしさ

堺市 高崎 雄声

お歳暮の礼状ばかり書かせられ

明治生まれ嫁に仕えるあほらしさ

島根県 藤井 明朗

禁煙の夫をほめて妻の酌

福の神背負うたように嫁がくる

倉敷市 野田 素身郎

高級品だけに不似合いが目立ち

借入金へ万年筆のインクきれ

子供のことにあって無口が喋りだし

残業の窓から相合傘をみる

芦屋市 丸川 初甫

ストーブがあるから上座へ遠慮せず

吐き捨てたガムを踏んでくターミナル

岡山県 池田 古心

貰い子が出世仕過ぎて捨てられる

出稼ぎの帰郷灯び早よう消し

東京都 石居 高志

日の丸を出す理由から子に教え

バカンスとまではいけない初詣で

電化して家は周借りのまんま住み

タクシー料金値上げ

メーターにプラスの額は客が折れ

大阪府 早川 清生

日雇の何あたたむる焚火なる

かなしみの日も妻として水の音

渴くとき飲む女をば多情とす

堺市 辻 圭水

もう時間ないに地下街ふみ迷い



そつとしてやるのが痛手にいच्छよく

誤解だと知ったは自殺の後でした

大阪市 橋高薰風子

政治家の顔を自然は相容れず

美しい炭火恋しき鳴雪忌

恋人に故郷を見せに幾十里

糸切れた琴はある夜の女に似

下関市 中村九呂平

身のほども忘れ私立を粕に言い

もう一度母に遭いたい寝返りし

花鉄いかりとづくに失せており

奈良市 宮口笛生

前照灯明く静寂した進路

風痛し後部喚呼の首を出し

秒単位機関士鋭いカンを持ち

神戸市 仲どんたく

格子無き牢獄などと胸を病み

寒明くる気配酒場の高島田

借金の子りふ練り練り乗り過ごし

平田市 久家代仕男

就職が決まった順に髪が伸び

八畳を狭く散らして子と二人

大阪市 本多柳志

正直に書いて税吏にうたぐられ

同郷の妬みへ元の歩で戻り

出雲市 原独仙

口論のあとの編目が二つ飛び

勉強を覗けばなんや放浪記

西宮市 野呂鶴汀

好きだから又うつむいて擦れ違い

レース編み強いて各駅停車なり

親切でしたのを恋に受けとられ

昔ならとおに切腹してるなり

新潟県 高野むじな

うたたねも男に生まれた徳と知る

米作るより買手待つ草生やす

大阪市 魚住満潮

続 西成界わい全句

仲間の死香奠十円ずつ集め

安宿^{どや}で書いたあのむしゃくしゃがレビー作

ドゴールさんは偉いと焼酎飲みながら

手内職背の子腹の子先夫の子

米代を飲んでしもうて父姉

殺人は晴れたが恐喝^{かつやけ}露見する

一宿百田ここにも春の風が来る

大阪市 石倉旅風

よそが出しゃうちもたてよで出す国旗

たばこ屋はガンになろうとなるまいと

愛媛県 村上旭童

何ほする海苔かしらんが寒いこと

旧正というものがあひ谷の村

親もあろうに極刑だ極刑だ

迷ってるのに自動ドアがひらき

神戸市 傍島静馬

娘に引かれお好み焼を喰べきされ

貫録が受け売り話と思わせず

おじいさんの年回算盤出して練り

笠岡市 木山遠二

用なしへ読めよ読めよとあてがわれ

序と跋を又読み本を愛すなり

大阪市 仲谷ハナ子

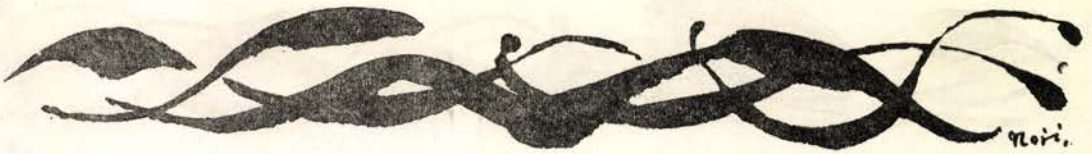
美容食牛乳卵と高くつき

合格へ先ず仏壇にあかり入れ

布施市 森下愛論

玄関に来るなり笑う女客

だんまりの女房どうやら赤字らし



緑遠い顔でナイチンゲール賞

大阪市 河井庸佑

傷口にふれるニュースはふせておき

いかめしいスタイルで来て雪がなく

大阪府 谷沢好祐

若き良し赤字の会社捨てて去り

松の内京は車で混んでいた

自由には渡れぬ赤黄青がつく

青森市 工藤甲吉

選挙の点数になるよう弔詞読む

銀婚はオイコラハイになっていた

宴会の方だけへボス顔を出し

置き場所もないクセ電気冷蔵庫

年五十赤い灯よりも我が家の灯

豊中市 林夢虹

春の芝生触れてはならぬ人に触れ

恋の目が耳が蝶の鼓動を聴いている

知りたきは知りたきは女の乳のその重み

大阪市 今西生菫

すつと行ってすつと帰った初詣で

社長とて肥満型とは限ってず

お流れ頂戴座敷を抜き手切ってくる

京都市 室井八九寸

いのち毛の二本たのみの人形の眼

親となるらし娘の肌へ聴診器

機械化の筏流行歌を乗せて

出初め式までも観光めく京都

岡山県 横山一声

八十が過ぎてても食うのを節約し

保険の額を言うて嫁のきげんとり

電気がま姑が水の加減きき

小松市 関戸宗太郎

香水をふりかけられて恐妻家

東大へうかって親が見直され

石川県 高山涼髪

十八で嫁にきたのが母のぐち

君の社のあの娘によろしく言っとくれ

美祿市 安平次弘道

就職組の不満を悪が待っている

素人でも可売春の匂いする

女優の野心裸をいといわず

定石を外れて運が向く皮肉

宇部市 平田実男

気遣いと思えぬ精神科の寝顔

鯉よりも鮒を喜ぶ通の舌

諫早市 川岡靈眼子

眉引いて今宵たつきに耐ゆる寡婦

貨幣価値ないのを斬髪料で知り

貝塚市 杉本一鶴

健康をよこせとストが出来るなら

ヒステリックな女患の笑い肌を刺す

神様の思いのままに雲流る

富田林市 浅川八郎

人間の習性老いて尚甘え

青森県 木村凉人

質流れ時計にもある幸不幸

花だより津軽は風雪注意報

定年を訪えばスクラップさと笑い

肺ガンと税金だけを喫って捨て

青屋市 唐崎専翁

無神論裏書してる事ばかり

倉敷市 奥谷弘朗

無責任それが楽しい人もいる

十年も提げた鞆が捨てがたく

貧乏を苦にせず一家を担う人

生活をテレビに取られてすごす日日



兵庫県 遠山 可住

✓じょうだんを言うたら手土産提げて来た

恐縮の数だけ猫の頭撲ち

初詣り頭を下げぬのも混じり

兵庫県 河原みのる

テレビタレント今日の喰べもの何だろう

二月十一日紀元節だったのを忘れ

講習会結局本と種を売り

姫路市 隠岐 不酔

足と手で話の通じる置炬燵

だまそうと思うて掛った四月馬鹿

✓結局は出すのにおこる子の無心

大阪市 田中 敏行

娘だけ晴着を着せて年新

しばらくのごしんぼうばかりの世にもまれ

子の受験コーヒーわかすだけの父

鳥取県 清水 一保

僕にする愛嬌でなし金にされ

出雲市 中川 晃男

小さい靴溢れる塾の狭い土間

恋をする女指にも科^{しな}つくる

金も名も要らぬ湯舟に伸ばす足

松江市 柳 楽 鶴丸

小企業私は残業未亡人

数学は弱い借金策うまい妻

京都市 都倉 求女

凍てついたように初発客の首

消防を信じて真近かの火事に寝る

暖冬か知らぬが月は冬の月

雪の舞う葬儀義理も浄化され

兵庫県 大江 秋月

記念写真僕は盲目じゃなかったに

子の切手趣味へ私が並ばされ

大阪府 松田 半月

ドラ息子だけが戦死をのがれたり

札幌にて

雪だるま昨日の頭もう埋れ

この雪はやがて極地につづくかと

今治市 越智 一水

少年工油をつけたまま夜学

受験期へマスクした子がいいらしい

三輪を買うても島は段島

夜濯の妻に鯨もつ日日続く

妻の手の乾く間もなし子沢山

戦争の傷あと冬に又痛み

柿くれし母にビタミン剤送る

竹原市 山内 静水

息子等が二次会うちへなだれ込み

信仰の自由家庭が乱れかけ

大阪市 森川 すみれ

世話やきが文句云い云い世話をやき

等岡市 高木 桃里

宿の灯の届かぬ梅が履かす下駄

うっかりは姑がしていたことで済み

浜田久米雄著 麻生路郎序

新刊

定価300円
送料 50円

一著名作家の川柳句集一

★本句集の著者浜田久米雄氏は岡山
の産。多年不朽洞会員として又
国鉄川柳人として古豪の名をほし
いままにしている。三十余年の柳
歴を飾る数千句中より百句を自選
し、各句に感想を附して世に問う
もの。★六〇〇部限定版 ご注文は早く。
★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七
五〇五〇番をご利用が便利です。
(切手代用可)

発行所 川柳雑誌社

電話大阪側六〇八一



軍刀とこどもたち

東野 大八

久しぶりに東京へ出てみた。
親友のTと新橋や銀座裏を飲み歩き、中目黒の彼の家へと伴われた。齡四十三だが、目下ヤメメだ。子供が二人いて上が中学三年、下が小学六年生。どちらも小気味のいい顔つきの男の子だ。
アパートの六階まで、エッチラオッチラと、酔ったボクたち二人は上っていた。鉄筋の頑丈なアパートで、そのコンクリートの四壁の胴中をはい上っていく靴音が無気味にあたり反響する。これをきくと「蒼竜」のタラップを思い出すと彼はいう。
彼は海軍兵学校の出身で、ミッドウェー海戦で捕虜になった。日本で有名な捕虜第一号の酒巻和男と同期の同じ特攻隊員だった。
酒巻は海中だが、オレは空の方で、空母の船室にいるときオレは魚雷を食った。二十何貫もある堂々たる体軀だったのだが「それがキャビンの丸窓からうまいこと脱けて出てね、今だにどうして出たのかわかん」
と相も変らずいまでもふといその

身軀をゆすってニガ笑いする。
部屋にどうやらたどりついたわれわれは、二人の男の子の前にべたんと尻持ちをつき、一きわフーリー言ったことだが、彼は何思ったかと立って押入れの底をことごとやっていたが、やがて一本の長刀を持ち出し、サラリとサヤを払った。海軍の指揮刀である。背広に指揮刀だが、ピタリと型に入った姿、形、さすが海軍大尉だ。「いいかセガレ共、父ちゃんはこのやうって何百の兵隊を前に指揮したんだ」
と休めの足つきにかえると、酒くさい息を吐いて、彼はこういって索然とボクの顔をみた。
「そうだ、立派なもんだつたな、五ツボタンはサクラにイカリだ」と調子を合わせて、ボクはその指揮刀を借りた。刀身は赤イワシだが、柄は金色でサクラの見事な彫刻があり、にぎりには花貝の象ガンが入っている。サヤは黒のうるしぬりで、三ところに金のサヤ止めが入っている。
「見事なもんだ。オレの方はゴボ

ウ剣だったがね」
とボクは丁寧に赤イワシをサヤにもどしながらいった。
「ゴボウ剣って何？」
と下の坊やがきく。
「短いこれくらい奴で、テッポウの先っぽにつけて敵を刺すんだナ、ヤリみたいなものだ」
「この刀より丈夫そうだね」
「ああ、それにくらべるとこんな刀、ブリキみたいで人なんか切れないヨ」
「キレイなだけだね」
と上の方もつまらなさそうな顔でいった。
こういわれると親爺たるもの立つ瀬がないとみえ、Tはいきなりもう一度押し入れの方へとって返し、何かをわざとくみにして子供たちの前につき出した。
「そんならこれをみろ、勲章だぞ」
二人の子供は顔を見合せるばかりなので、ボクが刀を置いてそれを受取り、キリの箱をひらいてみた。キンシ勲章であつてなんと功五級だ。もう一つはでっかい旭日章だ。
「ウワツ、手が腫れる」
とボクは冗談もつかずこういって思わず押し頂いた。
「いい勲章なの」
と弟。
「ああ、堂々たる勲章だよ、このおじさんが逆さまになったって貰えやしない。ボクが二千人の人間を救って死んだってサイティの功

続

川柳書架

(36)

迷子の影

今野 空白 著

★本句集の巻首に川上三太郎氏が、「この新しい姿を見よ」という序がある。跋は杜人社の添田星人、新田川草両氏の執筆。

★著者の「あとがき」の一節を抜萃すると、

「川柳というものに取り憑かれて約十五年、ロマンスも、リアルも年と共に、又頭髪と共にうすれ来て、益々ボエジーから遠去からんとする淋しさに釘を打ち、将又その上に何かを積み上げんとする苦肉の策を打ちめぐらさんものと思ひ立ちて、茲に駄句の中から、更に百五十を集めて一冊とした」と述べられている。(以下略)

★昭和三十八年六月三十日発行。B6版、八七頁。限定版一〇〇部、価五〇〇円(千共) 発行者 堀島県相馬郡小高町立病院今井宏、発行者 所川柳杜人社。

★著者は新人で川柳杜人社同人。自選句集だが一貫した作者の匂いを出している。

類題句集

川柳長屋連編

★巻頭に塚越迷亭氏の序がある。
★本句集は東都川柳長屋連の類題別の第十一集で昭和三十三年の夏以後である。

★目次——天文地理之部・人事之部・世相之部・娛樂之部・動・植物之部・形容語之部・動詞之部・雑之部。

★昭和三十八年十月二十日発行。B6横綴九十頁。定価百五十円送料三十円。発行者 東京都中央区日本橋人形町三ノ四川柳長屋連。

★東京の古い風物詩を探究したい人には参考になるだろう。

碧郎句集

縄のれん

和田 碧郎 著

★自選句集で巻頭には著者の近影が掲載されてある還暦の記念出版。

★昭和三十四年四月十九日発行。B6版四五頁、価百円。発行者 大阪市東住吉区田辺東ノ町五ノ一八 番傘折鶴川柳会。

★著者は番傘川柳社同人。

鴨

村田 紫蘭 著

七級なんだから……」

「フーン、そんなもんかね」と無感動に兄貴の方。

「やっぱり功五級となるとモノがいいね。このトビのスタイルなど生きてるようだ。この旭日章の赤いところをみろよ、赤いヒスイだ。今だに一点のくもりもない」ふと戦後、これが女給の帯止めになったものだ、とボクは心の中で思ったのだが、口に出すのは遠慮した。

Tはそれを二つの手にとってしげしげと見入っていたが、さすがにシンと酒のひいた白けた顔だ。砲筒のひびき、ラッパの音、そして愛機の快よいエンジン音の律動。そうしたものが一つの想いに押し固つてふいに彼の胸中を去来したものにちがいない。

「ねえ、坊やたち、君たちの父ちゃんに実はエライ人だ。国家のために生命を捨てて働いたんだ。その働きが立派だったからこの立派な勲章をもらったんだ。むかしなら、この勲章を胸につけたら、町長さんや、警察署長さんより上に並んで天長節をお迎えてきたんだ」こどもら二人はたがいに顔を見合せ、ヘーン、そんなもんかね、ともう一つピンと来ない顔だ。弟の方は立膝をして頬杖をついている。

「このおじさんはネ、この父ちゃんの前へ出たらモノもいえなかった。ゴハンを持ってね、眼の上に

かざしてナニナニ上等兵、ゴハンを持って参りました。というんだ。上等兵ってそんなもんなんだ。ところが大尉の君のお父ちゃんかね、アグラをかいて、オヘン出して、おお、ゴクローをこへおイトケ、というんだ」フーン、と弟がはじめてわかつたような顔をした。だが、兄貴の方は、しらん顔をしていつかせつせとノートを取りにかかっている。酔っぱらい二人のオトナのむ

岡田 甫主宰 近世庶民文化

発行所 庶民文化研究所
東京都新宿区戸塚町一ノ四四八

かし話より、彼は明日のテストが重大問題なのだ。

われわれは顔見合わせ、トテトトとラッパを合唱した。

われわれ二人はやがて床を並べて寝た。そしていつまでも軍隊時代の話をつきることなくくり返していった。それは掛け時計が三つ鳴ることで止んだ。

あくる日、ボクが眼をさますと二人の子供の姿はもうそこになかった。そのかわり、二つの勲章が、古ミシンの上に裸のままではうり出されていた。

居汚なくマクラを外して寝込んでいる相手のTを見下ろして、ボクは丁寧にその勲章を藏つた。そして、その下の古ミシンの肌手に置いてこう考えた。

「こいつにいいヨメを世話してやらねばなるまい」

軍刀の誇りより今は女房だ。

彼は愛妻を失った直後、勲章より幾度このミシンの姿から、妻の体温や面影を呼びさまされたことだろうか。ボクはそうした思いで部屋中を眺め回した。敷布もない汚ないフトン、ワタのとび出した座布トン、廊下まではみ出して積み崩れたままの本の山。

「オレはあの二人が高校生になるまでゼツタイ後妻はもらわん。下手にもらうと非行少年をこさえるようなもんだ」

そういつて酒をあおる彼の姿を、昨日のバーに思い出して、ボクは冷たく肩をすくめた。

戦場と家、勲章とミシン、それは結局今となってはあの赤いワシのブリキの指揮刀と同じ態たらくで武勲が眺められた。バカバカしいような、もの哀しいような、それは宿酔いにふさわしい感慨だった。

★巻首の「はしがき」から、

これは句集の形をしています。近頃興味を持ち出した版画の真似ごとがこんなものををつくり上げたのです。したがって句も懐古趣味の芝居、お酒などがどうございませう。しかも鴨川かいわいのものばかりで、かなり古い頃のものです。その代り版の方は至って新米です。

(以下略)

★目次、鴨・火蛾・残菊・流れ・木石・破片。

★昭和三十四年春発行。B6版和紙袋綴一四頁。発行者京都市中京区新町通り三条上ル村田柴園。

★版画と句との抱き合せたシャレタ本。句には京の情緒が流れている。

正夫の横顔

小田 夢路 編

★本書は故小田夢路が、昭和十九年三月十九日に二三才で亡くなった令息正夫君の追悼句と追憶記と故人日記の抜萃である。

★昭和二十年四月三日発行。(非売品) A5版半截袋綴、四〇頁。
★著者の後記によると戦事中紙不足で印刷も出来ず、磯野勇氏によって謄写印刷されたもの。

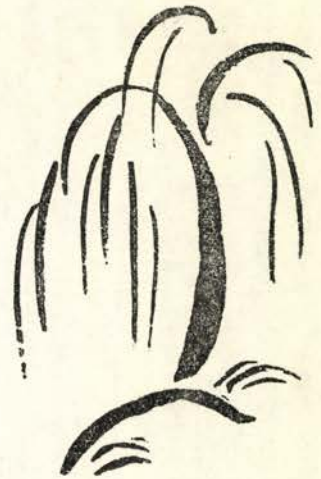
高単位綜合消化酵素剤

ビフテン

30錠・100錠・1000錠

大阪・道修町
森下製薬





川傍柳初篇研究(二三)

丸十府 高須啞三味
岡田甫 前田喜代人
清岡崎重義
藤井和雄

138 これて居て小面ラのにくいかねの礼

眠狐

高須「初めてオハグロをつける時は、七カ所からそれを貰って使う、という習慣があった。そして、後でその家々へ、礼を言

って回った。類句は左の通り沢山ある。

(傍一)

口の袖娘取りかね礼に来る

(玉14)

誰だのとよくよく見ればカネの礼

(?)

何処の神さんだとなぶるカネの礼

(タル一)

カネの礼おぼえていなと帰るなり

(タル九)

「小ヅラの憎い」は「おぼえていなさい」などと帰る、そういう蓮葉な所業を言ったものであろう。

前田「これでいて」が判らぬが「小面

の憎い」は、ツラを卑しめていうことで、憎らしい顔をしていること。カネの礼に回

る場合は、恥ずかしいので、大ていコソコソと帰るのであるが、この女、からかわれ

ても平気であるので、小面憎い感じがする

岡崎・清「賛」

藤井「これでいて」は「初カネの礼に

来た若妻のくせに……大面をしている」と

いう意味ではないか?

丸「これでいて」は、手でお腹の大き

くなっていくシグサをしたのである。もう

妊娠しているくせに、いけしゃアしゃアと

初カネだなんて、全く小面憎いってありや

しないというところである。タル一七37に

も「半元服でちっ首の憎らしさ」という句

がある。同想であらう。

岡田「丸説賛。初カネの嫁が、もうすで

藤井「これでいて」がジエスチャー入

りとは驚いた。

高須「古川柳解説には、そんなことまで

考えなくてはならないことを知った。

139 楊貴妃ハ小原で喜ツのんだやう

高須「美女楊貴妃のほーッと赤らんだ美

しさを、はめたたえた句。「小原」という

のは、小さい盃の一つ。それでちよいと一

杯きこしめしたような、桜色の頬を「一つ飲

んだよう」と形容したもの。楊貴妃を詠ん

だ句として一つの通り句。

前田・岡崎・清・川端「賛」

藤井「楊貴妃その人でなく、楊貴妃桜の

花の美しさをたたえた句と思う。

楊貴妃も小町もいずれ花の王

上下に楊貴妃のあるまつさかり

(小町桜、楊貴妃桜)

丸「藤井説も一応首肯されるが、やはり

確稿とおりであらう。なお「小原」につい

ては、飯島花月翁の「花月随筆」に詳しい

考証がある。要記すれば「朱塗の底深き木

製の椀を大原椀と称し、それに似たる酒杯

を大原形、あるいは訓の近似から小原形と

も小原盃とも、若しくは略して小原とも称

したのであらう。普通の木杯などより小形で

あった。……」

岡田「諸説に尽く。

(9才)

140 十三本とふく榎娘ハこし

一甫

前田「むかしは、街道の一里毎に目標と

して、路傍に塚を築いた(一里塚)が、そ

の印に榎を植えた。この句は、その榎を十

三本越したというのだから、江戸から十三

里、既に幾度も出た鎌倉までの道のり。い

うまでもなく松カ岡行きの嫁である。

岡崎「この句、松カ岡に駆け込む嫁の焦

躁感が出ている、と思う。

高須「とうとう嫁は越し」で「やっと

十三里来た」という感じを出そうとしたの

だらうが、持って回った感じで、感心でき

ない。現代句でも、こういう言い回しをす

る作家があるがボクは賛成しない。

丸「賛」

岡田「松カ岡句というだけ。

141 糸いやっと廿貳の春縁がきれ

前田「十九歳は女の大厄年。その十九で

松カ岡へ逃げて、それから三年目の二十二

で、ようやく縁が切れた、という句。「糸

いやっと」が言葉だけであるが、ますます

眠狐

であらう。

高須「これも松カ岡かと、少しウツザリする。十九の女の厄年から、三年辛抱して二十二とは、初歩の算術でいやみ。丁度十九で、氣に入らぬ結婚をしたとは……。」

丸「贊。「えいやつと」に、複雑な事情を暗示したつもりであらう。」

岡田「高須説に同感。感心できぬ句。」

142 文が長くて小便がしたく成り

泉 河

前田「遊女は、床に待っている客をほっておいて、長い文を書くことがある。それは、いやな客を振るための一つの手段でもあった。類句に

おえているえい氣をくじく長い文

(末二4)

隣では二番すんだに書いている

(末二11)

などがある。この句、類句はそのものずばりではなく、多少含蓄はあるが、下品な句である。

岡崎「小便がしたくなった」など、色氣もこそもない表現なのは、浅黄裏を暗示しているのであらう。

藤井「小便したくなり」は、キャンセルしたくなったの意で、馬鹿馬鹿しくなつて、もう帰ってしまおうか、の意味もあるのではないか。もちろん客は浅黄裏筋に違いないと思うが……。

高須「隣異議なし。但し、岡崎説通り「小便したくなり」の表現が難だが、それも寝たふりか何かで待っている客の「生理的現象」としては、面白くなくもない。

丸「贊。狸寝入りをしていたが、あんまり長くかかる手紙なので、小便がたまつて来た。もう幹ぶつてはいられない。」

岡田「丸説に尽きる。」

143 万八へ糸を通して後家ハ持

眠 狐

前田「万八」は、万のうち八つも本当がないという意で「うそ」のことである。

数珠に糸を通して亡夫につかえるということころを「万八へ」と言つたところ、凡手ではない。しかし、操行のよくない後家と数珠との組合せは、常識的である。

数珠さらさらとおしもんで後家だまし

(傍一44ツ)

岡崎「贊。身持ちがよくないせに、殊勝氣に数珠を手にして、亡夫を吊っている」と、世間をあざむいている後家。

高須「隣説通り「万八」が「嘘偽」のことは判るが、それと数珠との関係が説かれていない。数珠は、宗旨によつて多少の相違はあるらしいが、普通には「時の数」すなわち「百八ツ」の珠をつないだものが多い。それで、その「百八」に「万八」をかけたものだが、この句も「下手な謎かけ」で、いやみな句である。

(注) 数珠は念珠とも書き、正しくは「ズズ」と言うべきだが、通俗は「ジュズ」と呼んでいる。文字も「数珠」が正しいが現今では「珠数」でも通るのは、その「ジュズ」という呼び方からの通俗化で、「数珠を誂む珠」という根本義を知らないから来る誤まりと思う。

丸「贊。高須説通り「万八」は「百八」

にかけたものであるが、謎かけとまで見ずもつとあつきり見ておきたい。いや味よりも、むしろ奇想として、面白くないか。

岡田「現代人にはバカらしいかも知れないが、江戸っ子の洒落氣と取つて、これくらいはよからう。」

144 横ッはらたいたてつきや飯を喰

眠 狐

前田「つきや」とは、米つきのこと、自分の袴をもつて雇われて行つた。今とちがつて、往來を行き来して、自由にかせいだ。おもに戸外労働なので、雨上がりなどは多忙であつた。句はその一風景。

岡崎「横ッ腹たいたて」とは、どうしてなのか、よくのみこめないが……。

清「同感。「横ッ腹たいたて」という動作が判らない。」

藤井「労働のため腹がへつたので、茶を袋に入れる時。袋の横を叩いて、つめ込むように、腹一杯飯を食うということか、又は飯を食つて直ぐ働くと、横腹がいたくなる。それで横腹を叩きながら、米をついていることか、それだと

飯食つて横腹たたきたたきつき

となるところだが、どっちにしても、米つきの多忙さを詠んだ句とは判るが……。

川端「多忙すぎて、落着いて食事をする暇もない。食後ゆっくりお茶を飲む間もないくらい、次々と回るので、横腹を叩くという意か？」

高須「横ッはらたいたて」は、疲れた時にする動作の一つで、マラソン選手なんかがよくやっているのを、見かけないだらうか。この句は、つき屋の労働のキツイことを詠んだ句で、佳句と思う。柳南本では「喰ひ」と送りがないをつけているが、現代式には「食う」と読んでも面白いと思う。丸「茶袋の横を叩いて、茶をつめ込むという程でなくとも、すごい勢いで次から次と飯をかつく大食ぶりを、強調した句。「横ッ腹たいたて」は、実際にそうした様子をしたのであらうが、あまりそれを重く見る必要はあるまい。」

けつふうをしてからつきや二杯食い (タル六24)

米つきを二人とあてて米をとぎ (タル六20)

ともかく、当時大食漢として、信濃者につき屋とは好対照であつた。

岡田「諸説に尽く。」

145 したく金糸くぼの外は無疵也

五 扇

色紙短冊
書画用品

大坂戎屋

丹 堂

を申せしむ

前田「既出「お金」の反対を「仕度金」と言つ。嫁入りの仕度金を、舅方から嫁方へ送ること、美人の嫁のこと。笑うと美しい顔にえくぼが出来る。疵といへば、それが疵であつて、他は無疵という句意。

岡崎「「支度金」とは、貧家の娘が美人の場合、それを望んだ富家の息子が、嫁入りの支度金を送つて、嫁にもらうこと。従つて「支度金」といへば美人の異称であり、笑窪はまた愛らしいものだが、その笑窪すら疵ともみられるほど、金祿無欠の美女というわけであらう。

藤井「笑くはキズにしてキズに非ず、ハダカでよいと言われるほどのビードロ娘を表現して満点。

高須「「えくぼが疵」というのは、もちろん道説で「ほかは無疵」というのは、そのほかは何もない（何も持って来ない）ことを言っているの、この頁もって回った句が多く、感心できない。

丸川「確稿および岡崎説で、言う事なし。

岡田「同。

146 渡し守鏡をもつて追かける

秋紅

前田「わからない。

岡崎「女客が、船の中へ忘れて行った手鏡を、であらう。六郷の渡しあたりか？」

藤井「「急ぐ旅六文出して待っている」で、六郷の渡し貨払うや否や、大切な鏡まで置き忘れるほどに、鎌倉に向つて急ぐ嫁、急ぎこそすれ、急ぎこそすれか。

川端「賛。松力岡行きの嫁は、大てい六郷の渡し場で、追手に捕えられた。

高須「この句、ボクは日高川の句とおもふ。安珍を追いかけて行く、髪ふり乱した清姫を「まア鏡を見てからにしては」と、その渡し守が言うつもりだった、とウガったのであらう。

丸川「高須説賛。日高川を渡る頃の清姫はもう乱髪の間から角がはえ、半身蛇体になつていたのであるまいか。

渡し守髪のとけるを見て逃げる

(桜の実18)

日高川越すころ角が二三寸

(?)

岡田「その通り、日高川では、清姫はすでに蛇体寸前だったので、渡し守はビックリして逃げ出した。そこで、清姫は蛇となつて、日高川を泳ぎ渡つたはず。

一分でもいやだと逃げる渡し守

(明四宮三)

従つて、日高川説は考えすぎと思う。岡崎説の松力岡行きと取つていいが、とかくヒマさえあれば鏡を覗くのが女性の常、普通の渡し舟と解して、さしつかえないのではない。

(注) 山東京伝の「歴世女装考」をみると我國には平安朝時代から、懷中鏡があつたことを記している。

藤井「日高川なら「鏡をもつて逃げいだし」ではあるまいか？」

高須「後で見たのだが、柳雨・三面子兩先生も「日高川」と言っている。「角の生えたを知らぬ清姫」で、岡田先生の言われる「すでに蛇体」説には、川柳家は案外こたわらなかつたのではあるまいか。

147 わつちらが年が寄らぬと鉄漿の礼

眠狐

前田「鉄漿の礼」は既出。だが、句意がわからない。

藤井「不明。「わつちらが年が寄つたとカネの礼」ならわかるが「年が寄らぬ」とは何故か。鉄漿を分けてやると、あやかつて若くなるという、俗信でもあつたか？」

川端「「わつち」は町家の娘、内儀、下女、または色里の女性が用いた言葉だが、ここでは芸妓と見たい。年期を終えたか、或は身受けされて、世帯を持った朋輩の「カネの礼」に、まだ色里にいる以前の同輩達が言った言葉ではあるまいか。若作りの芸妓と、カネをつけた素顔の礼者とを、対照させた句と思う。

高須「川端説面白し。「わつちらが」は現代式には「私達は」だから「カネの礼」に對し、自分達のいつまでも「若い氣」でいることを、卑下した（或は自嘲と解してもよい）句ではないかと思うが……。

丸川「解し得ず。

岡田「七所から初鉄漿をもらった礼に行くと、何しろめでたい元服のこととて、藤井説のように、私たちもあやかつて若くなると、礼に來られた方も喜んだ、と極く普通に解してよいであらう。

高須「この句に對して、三面子先生は、俳句の「の」と、川柳の「が」には随分困る、と言っている。面白い発言として、ここに付記しておく。

148 だまつてる蟬をまゝ子持て居る

一甫

前田「「ないて居る蟬を実の子もつて居る」の反対の趣向で、意は明らか。とりたてという句ではない。

岡崎「「黙つてる蟬」とは、羽根を切られて、飛びも鳴きも出来ぬ蟬だろうか。そんなものしか遊び具に出来ない、不遇な親子、暗い句である。

清「岡崎氏の「羽根を切られ、飛びも鳴きも出来ぬ蟬」は、言い過ぎ。鳴かない蟬はメスであるが、この場合「死んだ蟬」とまで突つこんでもよいかも知れぬ。

藤井「欲しい蟬も、鳴かぬメスしかもらえず、いつも独りぼっちの継子は、手の中のメス蟬と同じくただ黙然。一茶の雀の句を思い出す。

高須「賛。「黙つてる蟬」は、もちろん「鳴かぬ蟬」（メス蟬）で、それをようやく一匹もらつた「まゝ、子」は、それに不

品質優良

タチカワペン

TACHIKAWA PEN

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙

大坂市東区富崎町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社



新進作家を語る

三窓・新子・清生

橘高薫風子

昨秋、毎日ギャラリーで開催された第六回短詩文学作品展へ私は次の五句を短冊に書いて出品した。

元日の駅前広場広場となる

労働歌謡が歌えば凄かろう

鶯の眼も駒鳥の瞳も鳥の目や

旅人も月もやがては去る砂丘

網刺する余生を埋めゆくような

その時会場で、俳句の六車井耳

先生に、俳句・川柳について少し

お話を伺ったが、後日、

「若い川柳家の作品を価値の高いものと私は興味深く見ている」との内容の書信を頂戴した。それ

で、一度機があれば新しい世代の新進作家の川柳作品を紹介する一文を書いて見たいと思っていたので、かくは筆を執ったという次第なのである。

岩井三窓

―句集「三文オペラ」より―

綴り方貧しき父は母を打つ

「番傘」の岸本水府先生は、句集

「三文オペラ」の序でこの句をと

り上げ、「正に初心時代にたたき

あげた正直な手法が生み出した新

鮮な本格川柳の精華である」と賞

揚しておられる。小市民の生活の

哀感を歌って格調が高い。

ストの日の少女峻しき事を言う
まだ童顔の残る少年女工である。
ストにかりたてられた女工達
は何時しか労働争議の熱っぽい渦
中であつて、小英雄気取りの闘士
の如く錯覚し、言行するようにな
ってくるのであろう。「少女」も
効いているし「峻しき事」も適切
な表現だ。

貧しければ腹郁としてリンゴの
香

「貧しければ」との出だしの表現
の妙。貧しい円居に新鮮に香りを
放つ庶民的な林檎。潔癖なまでに
すがすがしい林檎と貧の対照には
惚れられさせられる。この句の酸
郁たる林檎の香は、まさに現代川
柳の芳香と言えよう。

泣くによしぎしぎしと鳴る車井
戸

新派か何かの舞台を見ているよ
うだ。前後に長い物語を説く者は各
自想像することが出来る。物語性
のある句の多いのもこの作家の特
性の一つなのである。

どぶろくにえり子の声を看とす
どぶろくと言うからには、大阪
も阿倍野の場末か、西成の所謂
「酒の穴(小店)」でのごことであ
らう。酒の肴の目刺しもなくなつ
た。否、最初から、どぶろくでは
肴なしで飲んでいたかも知れぬ。
そこへ、連続ラジオドラマのヒロ

インえり子の爽やかな清潔な声が
流れて来た。作者はえり子(阿里
道子の主演だったと記憶する)の
声を看にして再び飲み初めるの
だ。何と現代的な句だろう。そし
て、何と深く澄んだ作者の詩心で
あろう。

醤油を提げてまったく詩心なし
醤油を買いに壺を提げてゆく男
たるものの、余りに現実的にすぎ
たわが姿をみつめて、作者は詩心
のかげらさえないと嘆ずるのであ
る。そして、読者には、三十を過
ぎた独身の孤独な三窓さんの詩心
を澎湃と感ぜしめるのである。

大原女にいくさの傷はすこしあ
り

大原女とは適切なものを捉え得
たものと感心する。どの句にも深
浅の差こそあれ、立派な批判の眼
が感じられる。批判と詩心が渾
然融け合っておればこそ、かくも
深く現代的であり得るのだらう。

実験例3 ニッポン国漁夫とあり
ビキニ環礁近海での罾竜丸事件
を諷んだ句だ。広島・長崎に続く
同胞の核爆発の洗礼を憤ったもの

だ。「実験例3」とは痛烈で適切
な言葉だ。社会批判の時事吟にし
てもこれだけ価値の高い句にしつ
らせる作者の實力には賛嘆のほか
はない。

その中の黒い金魚は孤独だな

黒い金魚、真つ黒い色は出目金
に多い。形態すこぶる醜悪であ
る。朱の絢爛たる金魚に混ってい
るそれは、深い孤独の影そのもの
のようであるのだ。作者はそこに
自分の心にある孤独と同じ色を見
たのである。

印象はうどんのまずい町だった
これ程心憎い句もない。うどん
一つで、うらぶれた寒村に毛の生
えた程度の小さな町を、適確に把
握描写しているのである。「印象
は」という出だし、「町だった」
の結びの回想的な感じからして、
これもうらわびた一人旅での感傷
であるかのようにうだ。

三窓さんは「番傘」の若手グル
ープの中核をなす作家で、四十才
を幾らも出していない年頃とお見受
けする。そのグループは「藪」と
いう小冊子を発行しているが、三
窓さんの句ともなれば、藪の域は
とくに過ぎて、太り盛り伸び盛
りの新樹であらう。而もこの新樹
たるやすでに一個の風格を備えて
いる。立派である。

時実新子

―句集「新子」より―

人や憂し鰯はザルに溢れ居て

厨には鰯がザルから溢れこぼれ
ている。ただ、それだけのものを
触目描写したにすぎないが、上五

に「人や憂し」と据えて、内容の

ある感銘の深い句に仕立てた。これが詩だと言えろのだと思つ。憂きひと時の作者が句に従いて鑑賞者の傍まで追ってくるのである。感情が立体的に移入した小品の洋画の趣がある。

死顔の美しさなど何としよう

長い人生を生きて来た人のデスマスク。積善と修養から生まれる美しい顔かたちを尊しとする人も多からう。死顔を後生に結びつけてひそかにおそれる人もあらう。が、作者はそれを一蹴している。心からの迷懷であれば女性として仕とするに足る気概の持主だ。作者の思想が出てくる句と言えよう。

月のかさめぐり逢わねばただの暈

可憐な女心が余すところなくにじみ出ている句だ。が、私だつてこれ位のことは言えそうだと、女性の作家誰しもが思えそうな句でもある。秀句とはそういうった要素を多分に持っているものだ。代表作と言つて良い句ではなからうか。

思われて木犀黄金のはかならず
木犀を黄金に見立てること、これは誰もがなし得る業である。「思われて……はかならず」の表現の旨さが価値ある句とならしめたのである。

耳の形が思い出せない好きなひと

耳、啄木は小奴の耳たぶを歌った。この句啄木ほどに肉感的でないが、価値は少しもひけをとらない。烈々たる思慕の実感を冷静にここまで昇華させるのが芸というものだろう。真珠の円さと光沢をそなえた句だ。この作家は愛恋の句が多い。しかも、心臓をわが掌のひらに刮り出して、さあご覧下さいと言つた絶叫調の句が多いが、私は好まぬ。私は私の油出した十句が、それらの句より高度なものだと確信している。

胸深く鼓鳴るなり逢わねばなり

一読、文字その通りであつて評釈の余地はないが、窈窕なる思慕とでも表現しようか。「胸深く鼓鳴る」とはいみじくも言つたものと思う。豈み言葉も句の内容にふさわしい。内容と表現が相俟つて句を深いものにした。歌集にしても、品子・白秋・勇・牧水等々恋を歌つた歌の多い歌集には、生々した清新の活気が漲っている。川柳家もすべからず、もっとも恋を詠い上げるべきだと思つたが如何。

逢えぬ夜の天に雨降る傘に降る
逢えぬ夜の心にひろがる嘆きは、宇宙の隅々まで埋め尽して、そんな夜の暗落たる雨と同じだと

作者は言う。そして、一身を蔽う傘にその雨の音を収斂させて思慕の情を切実に表現しているのである。見事な手法だ。それ故に、天は「そら」でなく、「てん」と大まかに読みたい。

押ピンを抜く華やかな日は終り
押ピンを抜いて華やかだった今日の一日も終わったという、小説の一節でもあるかのような句。これも川柳なのだ。一読、艶やかな張りのある句の裏に、さりげない寂寥感も感じられる。こんな些事を表現することだけで立派に新しい川柳たり得るのだから、開拓すべき貞女はまだまだ沢山あると言えよう。

寒菊の忍耐という汚ならし

寒中に咲く小菊は白いのが多いらしい。従つて汚れも目立ち、言わば老残の菊でももある。これを作者は忍耐と見て、「汚ならし」と直言したのである。寒菊を自身、或は一般の女性と見立てて鑑賞するもよい。このすっぱりとした新定が快い。寒中の白菊の活力を讃美するも詩、かかる見方もまた立派に詩であり得る筈だ。

低打つ釘は斜めになり易し

人の子新子さんの心情にして捉え得た句。打つ人の心の乱れを有情の釘に託しての表現には隙がない。一字一句に心が通うていて、

リズムも感情の流れのままに流れている。釘が曲つた、はつとした心の屈折の後の深いならかな感概と私は鑑賞したが、如何なものであらうか。

句集「新子」は旧臘一日に発行され、一カ月半にして五百部を売り切つたという。川柳界の常識を破つたのも実力のしからしめるところであらう。「ふあうすと」四百号記念大会で、梶元紋次先生から新子さんを紹介されるまで、私は新子さんの姓を、時実（ときざね）と正しくはよう読まなかったのであつた。競馬好きの私は、私流にトキノミノルという読み方をしていた。川柳界の幻の名馬は、いよいよ研鑽されてより深い句境に到達されるよう念願している。

早川清生

―句集「私達」の清生抄と

その後の「川柳塔」より―
悲しみを蛙ケロケロとしか鳴けず

喜びをも悲しみをも蛙はケロケロとし表現出来ない。蛙にとつては、相聞歌も挽歌もおどけた声をしか出来ぬと言ふのである。蛙の哀切と作者が感じとつたまます読者は感じ取ればよい。味う程に哀傷深い句だ。

表情があつたと見えぬ頭骸骨
「花の色はうつりにけりな」と概

嘆息したのは往昔の美女、現代の一青年川柳家は、頭骸骨を見て、かつては優しい情緒の持主、表情のこまやかな魔人の顔せででもあったらうものをと、甚だドライに嘆ずるのだ。表現はドライだが、ユーモアの味と句の内部にひそむ一抹の艶やかな幻想が、句にうるおいを持たせている。奇抜な穿ちの句と言えよう。

相談欄犬になめられたと思え
新聞の相談欄には人生の複雑さを物語るいろいろの悩みごとが訴えられる。「男に大切な宝ものを与えたのに、男はもはや私を顧やうとはしない。どうすればいいか」といった類のものである。相談欄には担当者の温徹的な回答が掲載されているが、おおむね、いっぱしの慰めにしか過ぎず、決定的な解決法とまではゆかないのが多いもののようだ。作者は、それらの悩み、訴えを一括して、「犬になめられたと思え」と痛烈な皮肉を以て答えているのである。こう突き放されては実際には立つ瀬がないが、どう考えて見ても、すべて、「犬になめられた」と速やかに達観するのが一番なのであることは確かな事実であらう。表現の奇想と皮肉の痛烈さが句を追力あるものにした。

質屋を出れば今日は満月

詠 近 舟 同

和歌山市 秋月 宏方

うどんする音も庶民の風物詩

ラッシュアワー敵も何人かはいそう

余生とは日暮れとほとほ行く姿

塗りかえてポストも春を待つ如し

大都市の中の一コマ易者の灯

今治市長 野 文庫

愛想のない顔になるアイシヤドゥ

ビリだとも知らず合格有頂天

今治市月 原 宵明

よい器量もって危険なスチュワデス

ギター背に負うて男の薄化粧

なに不自由なく雪山で凍死する

やがて悔む日あらん妻を酷使して

子の嫁を頼み別れるクラス会

名古屋市長 谷川 鮮山

不景気はここだけでなし例をひき

突く真似をする切っ先は胸へあて

孤独感尺八の音が好きと云う

東京都阿部 佐保蘭

「鶴の姿」出版記念会

夢でない句集へ感謝あるばかり

家康はえらいと思う五十過ぎ

お隣りに赤ちゃんがいて話しかけ

須坂市長 高峰 柳 児

境内の荒れ観光を目当にし

病人の気嫌薄れた陽へ慌て

生活に追われてせっぱ詰った時

でさえも、そこはかとなき感傷を

抱くのは、人間感情の動物だから

であろう。文字通りの句だが、七

七の十四音字の破調が甚だ効果的

で、軽い驚き、抑鬱的なユーモ

ア、簡潔なる感傷などの意味合い

を汲みとらせる働きをしている。

旨い句だと思ふ。

飛んでも飛んでも鴉夕日に追っ

つけず

俳句に、「秋の暮まだ眼が見えて

鴉飛ぶ」の句があり、深い淋しさ

は共通のものだが、句意はおのず

から別だ。この句の鴉は明らかに

作者自身の姿と思えるのだが、冒

頭の句の蛙も、作者清生さんの分

身のような気がしてならない。作

者には他に「夜が明けて鴉また飛

ぶはかはなし」の句もものしてい

る。

客席も継いだを養子気がつかず

作者の自信句である。何よりも

川柳的（在来の）だ。養子の句に

は佳句が多いが、中でもこの句は

圧巻だと思ふ。

源聖寺坂織田作が出て来そう

歪いが味のある句である。川柳

雑誌社の本社句会があった光明寺

筆太に本名を彫れ俺の墓

「筆太に」が良く、「本名を彫

れ」も良く、「俺の墓」の座五も

また良い。骨組、心組のしっかり

した筆僧を感じさせるような句

だ。私はこの句に西鶴の墓（本名

だけではないが）のイメージがつ

いて回るのだが、読者それぞれ心

に浮ぶ墓の姿があるに相違ない。

孤児院の出身童話知りつくし

から聞いて数多くの童話を知って

いる。面白い童話、淋しい童話、

皆、子供の心の情緒の芽を育てる

立派な童話ばかりだが、それが何

になると作者は言いたいのであろ

う。肝心の一対一の愛情の味を知

らぬ孤児をあわれと思わせる句で

ある。

ネグロ無職銃とった頃なつかし

む

無職のネグロには、生命を的に

して戦闘に従った頃の方が良き時

代であったのである。とにかく、

食わしてくれて給料も支給され

た。兵役や、まして懲役さえをな

つかしませる如きは政治の貧困と

言うしかない。そのところを強

烈に批判している。ネグロを据え

た着眼点もよく、句を重厚にし

だ」と答えられた。前掲の十句は

私好み偏していて批判の句は少

いことになったが、「川柳は批判

詩である」と言う言葉に最も適っ

た作家は、「川柳雑誌」では早川

清生さんと言えらるのではなから

うか。句想の範囲も非常に広く、

また些事に目を止めて立派に句

にするさまは驚くばかりで、誠に

縦横無尽という表現も言い過ぎで

はない。例えば、「再婚した貞

節の道をゆく」「女給だれも店の

植木に水やらず」「デパートにお

もちゃ動かす役でいる」「退職で

初めて社長から言葉」「メリーに

ごはんやうと歌舞伎座から電

話」「べからずべからずべからず

長寿法」「暖簾分けどころか定年

制を布き」「大臣の目に俺たちは

数字なり」「將軍の多くは床の中

で死に」「朝の鳥瞰動くものみな

大阪へ」などの句からもその闊達

さは窺えよう。

三窓さんは「番傘」、新子さん

は「ふあうすと」、清生さんは私

と同じ「川柳雑誌」と所属すると

ころは分れているが、われわれは

相互に親しい交際をもち、三窓さ

んのグループと私が、新子さんの

り、又、お二人は（清生さんも）

毎年私の家で開く私達のグルー

プの新年会には必ず顔を見せて下

さるのである。私はよい友人を持

って川柳する幸を心から感じてい

る。



千代尼

富士野鞍馬

しぶからか知らねど柿の初ち
ぎり
起きて見つ寝て見つ蚊屋の広
さ哉

この二句は、加賀の千代女の作と伝えられて、人口に膾炙されている。しかしその確証はないのである。「起きてみつ」は、千代女生前の元禄七年（一六九四）長崎丸山の遊女浮橋の作で、泥足撰「其便」にある句である。また伝説には、「しぶからか」は結婚当時、「起きて見つ」は未亡人になってからの作といわれている。それで川柳は、

柿の句は初恋蚊屋は恋放れ

（タル一二五）

柿の句で千代は熟した夫婦仲

（九九九、一二〇）

と詠んでいる。

星がはやひるのうき名も橋わ

たり

朝顔に釣瓶とられてもらひ水

これは確かに千代尼の作のようである。そして「朝顔に」の句が、千代尼の作風を代表している。それも川柳に詠まれ、

翌年は千代井戸端を去って植

（タル一一九）

朝顔の隣へみんな惚て行

（武四）

朝顔とふくべ植とく千代が庭

（タル八六）

朝かほで千代万代に名を残し

（九一〇〇）

等の句が見える。

「起きて見つ」の句に対して

は、非常に多く川柳になり、

いろいろ皮肉や揶揄や同情をおもしろく作られている。

お千代さん時分は蚊帳の狭さ

哉

（タル一二六）

それまでは千代の釣ったも只の鯛

（九一四三）

広い蚊帳女房の時は句にならず

（タル七三）

と結婚時代を想像し、

蚊やの中千代は小首をかたむける

（タル二九）

六七の広き女のひとりもの

（九一四五）

蚊が這入りましたのかえと千代が下女

（九一六三）

十七の蚊帳とは広い句を吟じ

（九一九二）

幾千代も世間に広き蚊やをつり

（九一九一）

気のわるい名句を千代は蚊屋

（タル二七）

で言ひ

煩惱と無常の籠る千代が蚊帳

（九一四九）

と「起きて見つ」の句が生れた心境をうがち、

お千代さん蚊帳が広くば泊ら

（タル八一）

うか

蚊帳よりはまた千代が句の広

（九一二六）

千代の蚊帳うらやましがする子

（九一二六）

沢山

（九一二六）

世の人に知られて広い後家の蚊帳

（九一七八）

などと揶揄している。そして千代尼の名声を、この蚊帳の句でたえ、

後家の名は蚊帳より広い発句也

（タル三六）

夏の句で千代よろづ代に名を残し

（タル四七）

幾千代も後家は風雅な名を残し

（九一六〇）

名の広い蚊帳は縫目が十七布

（九一五一）

千代迄も好文墨で名は残り

（九一二二）

鯛の句は末世に広き名句也

（九一六八）

千代までも残る操のいい女

（九一五二）

名高い句京都の布田加賀の鯛

（九一五一）

京都の布田は風雪の「ふと

ん着て寝たる姿や東山」である。また、吉原のふられ客のひとり寝をそれになぞらえて、

千代が蚊帳申訳する若い者

（タル八四）

けちな晩加賀の千代程広く寝

（九一〇五）

千代が蚊帳屏風ケ浦で喜助記

（九一一八）

千代は句が上手と浅黄思へら

（タル一五四）

など作られている。

山出しの千代が生れも小松川

（タル一一九）

加賀紋をきて風流な後家をつて

（九一四二）

かがみときちよもぞんじてお

（九一四二）

りまする

千代女は、元禄十六年（一七〇三）、加賀松任の表具屋

福増屋六左衛門（一説に六兵衛）の娘として生れ、俳句の

師は明らかでないが、伊勢風の中川乙由に師事したともい

われている。十六七才のころ

すでに近国の評判となっ

ていたらしい。通説によ

ると、十八才のころ、金沢藩

の足輕福岡某に嫁し、一男を

あげたが、間もなく夫と死

別、子供も早死したので、松

任に帰ったというのである

が、これも確証がない。二三

の文獻から見て、結婚してい

なかったという説もある。

剃髪したのは五十一才の冬

と推定され、その後素園と号

し、絵も上手であった。宝暦

十三年に「千代尼句集」明和

八年に句集「松の声」が出て

いる。そのころは女流俳人の

稀少な時代であったからでも

あろうが、その名前は芭蕉と

肩を列べていたともいわれて

いる。安永四年（一七七五）

九月八日、七十三才でなくな

った。



○丸句構建歌場所（西念寺）に於ける
塚越迷亭氏 一小谷源氏氏撮影

西島○丸の句と人柄など

塚越迷亭

昭和九年一月十日発行の「昭和川柳百人一句初篇」（宮尾しげを面並編）の二九ページをみると西島○丸の風采と筆蹟とが載録され本名その他が記されている。

本名 西島義豊 生年月日 明治十六年四月九日 出生地 東京市深川区露岸町 現住所 東京市四谷区寺町六 職 空欄 別号 ありすぎてため 御座

十四歳より投書をはじめ、雑俳、俳句、和歌、川柳、冠句、都々逸、なんでもやり、現今は川柳のみになり、もう二三年で死ぬつもり。

とあるが、それから（昭和九年）

二十余年経った昭和三十三年三月十八日の夕、ぼっくり他界しちまった。行年七十六（数え）だったが、その前の晩、川柳長屋連の寄り合いが向島の「雲水」（精進料理）で催され、来年の喜寿の祝いを盛大に催そうと世話人に芳浪、雨吉、一甫、義博と私が挙げられ、○丸自らも会場の裏手に采配をふるって貰いたいと大ばしやぎだったのが、それから二十四時間後には、本業の西念寺の住職として彼岸の入りの勤めを果たした夜、ぼっくり逝ちしまったいきさつは「句集○丸帖」の跋文にある通りであるが、今年はその七回忌が

営まれるにあたり、長屋連では○丸の句碑を西念寺に建立、その除幕式と記念川柳大会を三月二十九日に催すことになって（この一文が出る頃は済んでしまいが）各方面から多数の参加を申し出られて全国大会の様相を呈すのではないかと、長屋連の店子一同遠いところから参加の柳友のもてなしに頭を悩ませている。

十四歳で投書を初めたと○丸は書いているが、その頃まだ新川柳は興っていないから勿論私達のいう川柳ではない、いわゆる旧派の川柳だったろうが、雑俳、俳句、和歌、冠句、都々逸と新聞や雑誌の読者文芸へ何でも投書したのは、ずっと後の昭和初年まで続いて、ありすぎてだめといっている別号は私達の知ってるだけでも、岸の柳、義豊子その他数知れずというほどで、私が投書を始めた大正三年頃の新聞、雑誌にそれらの名を見ないものはない。私が○丸と知り合ったのも大正五年か六年の頃で、当時娯楽雑誌の王者だった文芸倶楽部に「滑稽問答」という欄があり、その投書家達が集まって、問答会というのを催して毎月の会の模様が海賀変哲、武田おと坊（俳句の驚塘）など短文芸の顔の筆によりて面白く説物化されていたのに魅かれて、飛び入りしたのが（丸の内の花家）○丸との出会いだ。そこであった私のいう川柳以前の友達というのが、前記の変哲、おと坊のほか田中ずか、奥村万柳、高須あざみ、五味茶童、水島山人（後に不老）、小野直山、井口菊奴、鈴木凸太、貴田我茶、田沢騎士、近藤蕉雨、松本一可その他ちよっと思ひ出せない多勢という顔触れで、毎回十五、六名の集まりだったが、飛び入りの私でも直ぐこの集まりの雰囲気溶けこむことが出来る気易さがあったし、名を知ることではお互いが知己であることは、初対面の川柳家同士

がすぐ打ち明けて話し合えるのと同じ、というよりもっと親しみがあつた、流石に変哲、驚塘、蕉雨等の年配を呼び捨てにはしないが、その他は俺、お前の仲間となつたのは、二、三時間経たないうちだった。

そもそも○丸とは、まるまるというのか、れいがんというのか会うまではあいまいだったが、川柳界ではれいがんで通っていた。というのが、この名の由来が日露戦争（どうも古いことで済まないが）の号外に○○が使われているのから思いついて、一つを丸と本字を使って、本人はまるまるのもりだったのを、その頃柳樹寺の幹部である角恋坊が、○丸の深川霊岸町生まれを知って「れいがん」と呼んだのが最初で、爾来川柳界ではれいがんになったと、○丸自らが話していた。

深川霊岸町で生まれた○丸が成等院へ入ったのは明治三十九年九月二十八日、それから二年後の四十二年十一月十七日、西念寺の住職を任命され二十三日に晋山式を了え、二十六世文誉和尚となつた。西念寺の開基は江戸城半蔵門を守った服部半蔵で、戦災で焼ける前の西念寺に半蔵の槍という太さは私の手では握り切れない三間柄に五尺ほどの穂が付き、一人で

持てない重さで庫裡の長押しを圧していたが、現在は穂先も欠け槍の柄も三分の一位になって新しい書院の床の間に置かれてある。西念寺に入ると直ぐ始めたことも会は、四谷から新宿へかけての少女にお話を、童謡を聞かせ、広い寺内を遊びの場所に、勿論絵本やお伽草の本なども読ませた。そういう仕事の世話をやく書生さんの寄宿もさせたであろうことは言うまでもない。週刊朝日の好読物と謳われた徳川夢声の間答有用に登場した明治製菓の浦島社長も○丸和尚の感化をうけた青年だったと語っていたし、昭和の初め頃NHKが愛宕山からT O A Kの電波を出していた頃、お話し時間に○丸が初放送をした時には、西念寺こども会でお世話になりましたと母子二代の女性が多勢あって、その頃の愛宕山の記者クラブを驚かしたものだ。

それよりちょっと前だったが、日刊紙（紙名失念）に西念寺横丁の都々逸和尚の題下に○丸の作品が紹介されたことがあったが、その頃の○丸はたしか都々逸鹿の子吟社の同人として「鹿の子」を切廻していた。短文芸のすべてを作った○丸だが、雑俳関係では万朝報の万友会、都々逸の鹿の子、川柳のきやり吟社の三つだけだが、

切り廻したのは鹿の子ときやりで、その両者とも至宝とたたえられたにも拘わらず、途中でふいと（気に入らないことがあったからではあろうか）投げ出してしまつて、当座は会へも出ないで、みんなを淋しがらせたが、○丸自らもみんなと会わない生活なんぞ出来る筈がなく、半年とは続かない籠居だった。投げ出した理由はそのどっちも語らずじまいで、鹿の子の人達も、きやりの人達も……といつても今では周魚と私だけ……、

ああこう類推してみるだけである。

東京の川柳界に句会を初めて催した亡き文象老（93で一昨年秋他界）の思い出に左の一文が○丸帖に載っている。若き○丸が浮きばりされているので再録しよう。

私と○丸さんの初対面は、明治三十七年十一月十三日、その九月から、開始した川柳研究会の第三回目の開会日、場所は上野



彫りあがった○丸句碑

公園内の貸席三宣亭（経営者田村西男氏）で、来会者は割に年配の方が多いため、和やかな内にも話題は尽きず、それからそれへと賑やかであった。その内に西島義豊と記名された若い僧侶の方があった。独り静かに作句に専念、此方が後の○丸さんであった。この青年川柳家を見て、金比古氏はつくづく感じたらしく耐う。「アアいう綺麗な

好男子の坊さんに引導を渡して貰えたら、何と快よく成仏が出来ることであろう」と、以来何かの機会には能く口にした。敢て氏の軽口やユーモアばかりでもなかった。

その後約小一年ばかりで、本所

の江東川柳会で再度面接、その時は義豊でなく○丸と改めておられた。併し前同様作句に懸命、川柳を生かすとも言えよう、またいづれの川柳句会にも先ず氏の姿を見受けない事は夢かつたともいう。その他雑俳や落語研究会にも同様であったそうである。作句については後年土匪吟に締切りときいて○丸十句やり等ともある如く、その作句数は数万にも上がろう。古今の柳人を通じて氏の右に出る作句数を持った人はまれであろう。

とあるが、○丸の作句数というものは、ここにある数万どころではない。大正初期から亡くなった昭和三十三年までの、東京で催される川柳会（句会）に○丸の出席しない句会はないといつても過言ではない。まして大正から昭和への十数年の東京の句会は、席頭無制限というのが全部といつてもよかった。そんな句会での○丸は、文字通り水を得た魚で、もりもり作った。文象老の一文にある「締切り」とはその消息をよく伝えている。私はきやりのえとにあたる川柳家の末年の項で、○丸を末年で紙（句箋）を食う横綱に推した覚えがある。

尤も○丸よりひとまわり下の鞍馬などは原稿紙の方で○丸と対抗

出来る紙食いといえよう。

ペンが傍道へ入ったようだが、○丸の句箋の使い方は、それほど目ざましかったが、東京の句会が無制限を廃した当時の○丸の惜げ方と来たら一入だったことは言うまでもないので、長屋連の集まりは今でも無制限でやっているのは、○丸を喜ばせた名残りでもある。無制限華やかなりし頃……つまり大正末期から昭和初期……西念寺で作句研究会その他がよく、三分間吟の会を催したもので、十数題の出題のそれに、各題十五、六句は確実に作ったのは○丸だった。それ位の速度でなければ無制限でもりもりとは作れないのがほんとうであろう。その頃からの柳友達は、今でも旺盛な作句力とスピードを持っているのか、三分間吟をやったがつてもいる。○丸の追悼句会（33年5月3日の49日）では席頭無制限をやってみたが、選者が脳貧血でぶっ倒れるほどの集句はなかった。……私の記憶では不浪人、雀郎の前載がある……。それというの、古い連中がみんなリキがおとろえたのであろうし、新人はそれに慣らされてない、といった関係からと思う。

それほどの○丸だから生涯の作句数は、数十万に及ぼうが、さて残る句となるときにはないこと

も事実で、そこに川柳の難かしさがあるのだし、その難かしさを克服すべく、作句に励んだのでもある。○丸の多作は推敲の段階をみんな句箋に書いたのではなからうか。うわ水を流すといった気持ちで、……○丸や私は句は流るる如く生むことを主張していた……。

捨てるには惜しい気もあった。というのが期待しない句が、時に入選、高位になることが再三あるので、捨てられないのもあるというより、句を作るということに喜びがあるので、抜ける、抜けないより、句箋と鉛筆を握って句会の隅っこで、呻吟していることが○丸の陶酔境であり、その○丸の姿が尊とされたのでもある。それはどの○丸の句を示さなければこの稿がしまらない。といって○丸帖一冊にしたって相当量になるのだから、それからピックアップするのは大変な仕事で……その親切さがなければいけないのは百も承知でいながら、直ぐの間には合わない。そこで○丸帖の編さんの故智にならって、百人一句初編は（これは自選）と全国川柳推薦句集（これは自選ではない）から10句と7句を記してその責をふさう。

昭和川柳百人一句より
仏ただにこやかに居る恐ろしさ

どうしたら敵が愛せる仏の灯
母のする通りに座る仏の灯

蜘蛛の巣へ仏怒ろうともしない
秋の灯の貧しい膳へ黙りがち
母一人五燭に更ける足袋の穴
吹き降りの子に母親も二時を待ち

起きられるだけは起きてる子供の目
雑念をジット見据える目をまとも

江戸桜なぜそう人を焦らさせる
全国川柳推薦句集第一、二集より
それぞれの鉦が違ふ男の子
馬の足てんやわんやでさにあら

獅子舞のよこれて帰る小正月
子宝にまだ恵まれずつやぶきん
時ならぬどよめきを見る母の洒落
寮の娘も帰り盆灯籠灯り
父呼べば父をそこにあり父の顔

このように句を並べてみると、
茲には○丸のすべてが出ていないことに気がついて、私はうろたえざるを得ない。通で、粹で、情に厚く、そして社交家だと数えればきりのない、まことにできた人という面が、これらの句からは知り難いそれを知るためには「句集○丸帖」を、とPRしておこう。
現世の延命院日当たとか、人魚

のさしみを常食にしているのじゃないか、と言われた○丸、老いた○丸に向かって老妓に「この人若い時はいい男だったろうにネ」と長嘆息せしめた○丸となると、醜種がごまんとありそうに思われるが、その点は実にきれいだった、○丸が結婚したのは、大正八年の春だったから数えて三十七だから晩婚の部に入るだろう。私や啞三味、万柳などは問答会としてお祝いしたことをおぼえているが、とめ夫人は二十二の若く美しいひとだったで、口の悪い問答会の悪童達も羨ましがるとみだった。

妻帯するといろいろな会合へは出なくなるのが多い……川柳に遠ざかるのにはそれが多い……のにその頃から川柳、都々逸、尚芝居、寄席と殆んど毎日出歩く○丸だった。会合の帰路のいっばいのつきあいも欠かさない○丸だが、帰らない旅にもずっと居なくな

り
と私は追悼吟にしたが、さよならをかわして別れたことは滅多になかった。つまり上手に若妻の待つわが家へあざやかに友達の目を眩ましたのでもある。このくせは昭和四年六月九日愛妻とめ夫人を喪った後の三十年間を二度目を貰わないで過して死ぬまで、変らなかつたのは、今にして思えば、いつ

でも、どこでも愛妻の傍が○丸の中にあったのではなからうか。それに夫人に先立たれた前の年の秋には愛娘勢至ちゃんを五歳で喪っているのだから、○丸にとっては身も世もあらぬ時代と言ひ得るが、その頃から川柳一本に打ち込む○丸が出来上がって行ったのである。

義彦君以下三人の男の子を、残された和尚の身のまわりを心配する西念寺の檀家は言うまでもなく、親類、知己は後添いを持ってとすすめ、縁談を持ち込んだが、受けつけないで、じいや、おばさんを相手に三人の男の子と書生さんの面倒を見たのだから、ある意味では強情とも言えるが、その頃の川柳きやり吟社は至宝○丸によって切り廻わされ、岡魚、夢一仏、杜若、万柳、桃太郎、磯松、私などが同人で、全柳壇に覇を唱えていたのでもある。その頃の○丸の川柳への献身は異常といっている。きやりの誌上への連載した、古柳書の種類や、柳誌年表は後進にどれほど感謝されているか知れない。埋くさ的に片言、隻句を記した○丸帖もまた、今に至っても感謝的だった。長屋連が句集を編むにあたって○丸帖を選んだのは、そうした因縁からだった。

○丸を語るに落としてならない
ものに仏前結婚……川柳結婚でもある……がある。その第一号は啞三味夫妻で、そのため○丸は仏典を調べたら、ちゃんとあったよと西念寺の本堂で挙式、誓いの印は新郎、新婦に数珠……男持ちと女持ち……を授与したのが印象的だった。新婦は茶堂の令姪なので、式に列したのは川柳家と問答会の連中と親族で、川柳結婚の名があるゆえんで、啞三味夫妻はもうじき金婚式が来る。序だから言うが、仏式による川柳結婚の第二号は茶六で、媒酌人は矢野錦浪……谷孫六で売り出しの頃……。列席者はオール川柳家、このお膳立てから司会を私がやった訳だが、第一号で見聞しているの、これは楽だった。披露はどちらも西念寺の車庫で茶菓によってで、簡素化の意味でこうした結婚式がとりあげられてもいいと思うが、そういう私も第三号で○丸の手にかかったということだけ伝えて、もう紙数が尽きたからペンを闊かして貰う。

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊（五〇枚綴）三〇円
送料（二冊分）二〇円



麻生路郎選
北川春巢選

婦唱夫随妻のセンスを着せられて 秋方市 宮川 珠笑
味覚に鋭い男瘦せている 同
外孫を抱けばこちらの孫が泣き 同
点滅の青をくぐっている暮し 同
ほほずりのために毎晩髭をそり 同
残業が長びく電話三味が鳴り 同
会費徴収施しうける如回り 同
忌の家の一軒灯いている夜ふけ 同
功成って買うた車と心中し 同
酒代のかわりに薬代が要り 竹原市 杉原 愛鳩
旦那はん急死で元のお師匠はん 同
くさる程貯めて注射でつぐ命 同

借金が仕事の張りになる若さ 同
胃に穴のあくまでよくぞ飲みつけ 同
三号が出来た頃から落目なり 同
神木を切った報いという落目 同
よく続くねえと褒めてる眼に非ず 新居浜市 小村 孝正
社の顔を自分の顔と思ひ居り 同
赤い唇売春法って悪法よ 同
テープ式教師で生徒眠くなり 同
薄ノロに金あり美人の嫁御来る 同
明日と云う日もあり今日を くさるまい 同
これと云う目出度さもなく松 がとれ 岐阜市 日 東 里
安普請目立つ所へ見栄を張り 同
以下同文以上総代感謝状 同
鷹揚に笑って首は横に振り 同
妥協せぬ心算候文で書き 同
赤電話電話のきしる音も入れ 同
みくびった奴がお寺の門へ寄附 (新居浜市) 安藤 桂仙
観光車 明治は教珠も用意して 同

現代柳人録



(一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
(四) 現住所 (五) 生年月日 (六)
出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九)
自信の句一句 (一〇) 川柳以外の
趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二)
川柳に手を染めた年月

(243) 戸奈已之介

(一) 十七巳之助 (二) 巳之助 (三)
(四) 兵庫県川西市久代美濃
垣内五の九一 (五) 明治四十三年
七月十一日 (六) 大阪市 (七) 会
社員 (八) 池田五二九三 (九)
投書してやるかと腹の立つ日なり
(一〇) 俳句 (一一) 有 (一二)
昭和十二年五月

(244) 中松恒雄

(一) 中松一恒 (二) 恒雄 (三)
(四) 加賀市作見町十二番
地 (五) 大正三年九月二十三日
(六) 小松市日末町一四八番地
(七) 医師 (八) 片山津 (九) 一八
一五 (九) 録音は家族のすすり泣
きもいれ (一〇) 入浴 (一一) 有
(一二) 昭和三十年頃



生唾をのんでご辞退申し上げ	同	子	パチンコ程性根を入れてせぬ仕事	同
訪問の音がテレビへとときかね	同	子の試験親の落付きまで奪い	同	同
金策の事追伸と書いて出し	同	赤札を首にかけたい嫁き後れ	同	同
儲けても損しても上戸酒になり	高知県 山川 勝子	捜査陣とうとう犬の世話になり	金沢市 根上 杏花	同
鎌を振る八十連者を羨まれ	同	我が齢を他人に勘定して貰い	同	同
貸し衣裳待ち兼ねて剝ぐよい日柄	同	置き去りにされて晩酌飲み足らず	同	同
神前で誓って家裁で離婚沙汰	同	坪数万まだある草の生えた土地	同	同
マージャンに娘の立てた逆箒	同	八百八橋惜しい名の橋消えてゆく	大阪市 山田 李鳥	同
ああ云えばこう云う唇を寒くぬり	京都府 大久保 和三郎	火事の記事家の消火器光らせる	同	同
十云えば一つは悟る会計課	同	禁煙をするには惜しいライター持つ	同	同
ここからは舗装がされたマスコット	同	持った箸額にとどくざるのそば	同	同
ズロースを竿の高さにはにかませ	同	病床の窓の広さに励まされ	玉島市 水粉 千翁	同
良心のかげら嗅いがたしかめる	同	母のない子が母の名を海へ捨て	同	同
スキー服娘ざかりを包んで来	河内長野市 森本 黒天子	見送りに混った母の眼に出遇い	同	同
時差出勤たるんだ顔が乗り合せ	同	死にもの狂い隣の人の手も引いて	同	同
地下道を往けばごろ寝が目に入り	同	泊る気にさせて飲ませてほり出され	香川県 三井 醉夢	同
貢ぐだけ貢いで人のものにされ	同	パチンコのファン旅情もなくとられ	同	同
無銭旅行ではないのに立ちどうし	見島市 伊丹柳 瓢子	身の上は相手次第で筋変り	同	同

スマートで
着心地良い



GOLDEN
O.S.K.の
紳士服
各地特約店に有り

(一) 西尾清一郎 (二) 青一 路 (三)

(246) 西尾 青 一 路

(245) 早 川 清 生
(一) 早川清正 (二) 清生 (三) 野市 (四) 大阪府三島郡島本町山崎谷四四 (五) 昭和四年九月二十三日 (六) 大阪市福島区大野町 (七) 公務員 (八) 側〇一五一 (九) ちゃんな模造氷柱でペンギンよ寒いな (一〇) いろいろ (一一) 有 (一二) 昭和二十八年十一月



軽蔑の目で酔興の文を見る	同	お点前をほめてしびれのこと にふれ	同
後輩の皮肉は盃持って聞き	玉島市 井上 旭峯	花鉄和服の袖が邪魔になり	同
就職のバッチが光る肩の中	同	無策の日夕陽の色もものうくて	鳥取県 鈴木村 諷子
昨日ならというて融通ことわられ	同	金少しここにも撒けとバスを止め	同
母もののモデルに似てる妻哀れ	同	煩をつねって一等旅館の廊下を歩く	同
適令期すぎても理想は下げませぬ	大阪市 銭谷かをり	お隣のピアノ月賦の音を出し	兵庫県 斎藤たけお
ああ無情人のよいのは出世せず	同	裏作は捨てて出稼ぎ精を出し	同
反抗も続かず大樹に寄りかかり	同	あの家にピアノと近所あきれさせ	同
朝の町長女二十才の景になり	倉敷市 水谷 谷水	金策に來たのに保険に入らされ	奈良市 村上 春己
引き立て役ですのと未亡人美しき	同	山焼は火消がつける面白さ	同
寄附哀れアウンの呼吸で断わられ	同	山焼の肌まんだらに雪化粧	同
君ももう齡だと嫌な見舞客	鳥取市 近藤 秋星	工事場は戦争やっぱり鉄甲	岡山県 秋野 萩路
思い出に生きる女の影細し	同	早春へ恋愛もなく芹を摘む	同
そのことにふれずにやるも愛 のうち	同	叱られた先生へ出す年賀状	同
往診の医者には悪い枸杞をのみ	新居浜市 賀本 昇	農相は何を云おうと小百姓	仙台市 平野 光道
停年へ株屋が先に顔を出し	同	梅干になるだけの梅の咲く僻地	同
大仏は奈良朝以来坐りきり	同	暖房は完備画面はキスシーン	同
長尻に猫も欠伸をして出掛け	岡山県 永宗 宗義	山脈に雪ふるさとは老いと化し	兵庫県 常岡 孝風

- (248) 原 独 仙
- (247) 酒田 清子
- (一) 酒田清子 (二) 清子 (三) 酒田清子 (四) 大正元元年十月二十三日 (六) 富田林市本町 (七) 会社員 (八) 三四五二 (九) 辛橋をこぶしの中に握りしめ (一〇) 油絵 (一一) 有 (一二) 昭和二十九年三月

(四) 豊中市岡町北三丁目二八 (五) 明治三十五年二月十五日 (六) 奈良県天理市 (七) 病院事務長 (八) 豊中 〇六二九六 (九) 蚤にも喰わせず天下もとらず (一〇) 弓道 (一一) 無 (一二) 昭和七年七月

味のてー

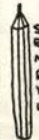
モダン 川柳

心齋橋大丸北の辻東へ

御 門

TEL 〇六六八四

御集会には階上を御利用下さい





コーヒーで激論出来るのも都会	同	香具師もこのごろ自動車で乗りつける	同	小商一年卸問屋で顔がきき	大阪市	宮尾あいき	同	アンブルで風邪追い出してデイトする	同	働けて産めて農婦の手の固く	青森県	岩淵 一星	同	土地があり過ぎて嫁まだ見つからず	同	新しい靴だ春風吹いてくれ	バロアルト	斎藤 流路	同	子の頭なでつつ親の夢とやら	同	プロサロ嬢キュークツだわとのたまわく	神戸市	大野木真砂	同	琴線にふれしは永久の別れ際	同	ママの風邪停電みたいあわてさせ	松原市	守屋 万竿	同	笈を負い先ず予備校の戸をたたき	同	金策うますぎて手袋を忘れて来	羽曳野市	古川 静波	同	新築の予算が足りぬ壁のひび	同	漬物だけで育つ身にもなりたし	岡山県	梶川 瞳美	同	泣いたとて癒えねばせめて	同	大小屋を五輪までにと孫せがみ	笠岡市	谷本鈍愚坊	同	数年をぶさたの野良着かび臭し	同
お説教されて来たのへよって来る	山梨県	爆弾をかかえた様な姑の座	同	初春の便り新婚旅行から	笠岡市	高木 淡柿	同	酒やめてニコソテレビ買うと云う	同	先輩に大物がいるたのもしき	七尾市	松高 秀峰	同	毒舌な奴だと云って道具にし	同	えさやりに来たのに鯉のあわてよう	新居浜市	高石 斜子	同	お疲れを迎える庭へ水を打ち	同	底辺にも娛みはあるサおでんの立ち飲み	八尾市	吉田 博一	同	みずくきのうるわしおめしかなわすも	同	よい機嫌孫に頭を叩かせる	堺市	三宅 ろ亭	同	一枚はお記びばかりの筆不精	同	わがままが云える他人の飯を食い	宮崎県	野口卯之助	同	嫁ぐ日も近し疊の表替え	同	介抱をされたいままに酔ったふり	大阪市	福富 隆子	同	日溜りは猫は先きて待つて居る	同	牛歩にもお手盛り手当つく議員	富田林市	吉岡 美房	同	つめ込んでおいて早く降りとは無理なパス	同

(一) 原千太郎 (二) 独仙 (三) 〓 (四) 島根県出雲市塩冶町 (五) 明治三十六年十一月四日 (六) 島根県鏡川郡陵村 (七) 紡績検査員 (八) 〓 (九) 訓す子の吾が幼少に似てわびし (一〇) 趣味多し (一一) 有 (一二) 昭和四年頃

(249) 尾崎ほたる

(一) 尾崎光 (二) ほたる (三) 〓 (四) 布施市菱屋西四十五番地 (五) 大正八年七月二十五日 (六) 大阪市 (七) 会社員 (八) 大阪側六八〇八 (九) お互いに一寸阿呆で夫婦もち (一〇) 洋楽・写真・絵画 (一一) 有 (一二) 昭和三十三年九月



子に晴着ホツと安堵の寝正月

羽島野市

藤田ひろし

空っ風中小企業につきささり

八戸市

川村 映輝

犬だけをたよりに鉄砲肩にかけ

滋賀県

尾牛多駄志

手を焼かす孫も介抱に來たつもり

西宮市

船津 千夏

退職金あてに我が家の設計図

松江市

岡崎 祥月

節分の鬼先き先きで追出され

京都府

西村句楽坊

ご先祖を祀る仏具をまだ値切り

堺市

青山慶之助

トンネル内脱線事故で又白書

美本市

高木繁太郎

判を押す課長の欠伸貰って來

笠岡市

松本 忠三

孫の守しつゝ覚えた千羽鶴

失

名

ホステスに叱られるほど通い馴れ

大阪市

藤富 淀月

卒業をすれば勉強するつもり

西宮市

鶴飼 鮎子

ごね得が結局土地を高く売り

守口市

樋口 一峯

趣味ですと夫に背中向けたまま

岡山県

阿部 良江

養成工住友マンとなるほこり

大阪市

西木 保夫

祈る手をほどこいて寄附を受けとる手

静岡市

多々良英舟

金 泥 集

麻生 葭乃選

「ブラット」

ブラットの二人に非常ベルが鳴る 酔夢

あした又逢えるにブラットまで送り 同

おえら方ラッシュのブラット知らず済み 同

ブラットの陰で添えない娘が送り 同

小ぼけなブラット左遷の男降り 同

ブラットのぼんぼり花見はこちろでさ 同

湯の町はブラットからも湯気が見え 同

国賓が着くブラットの菊の花 同

単線の名も無い駅の春景色 同

ブラットで母のへそくり握られ 一栄

栄転もセンチになりまます発車ベル 同

冷えくとしたブラットを夜行で見 同

ブラットの最後の握手車窓でし 同

ブラットの野次を浴びてゐるハネムーン 同

車窓からあれこれ買ひも旅の味 同

ゴルフ場出来てブラット模様替え 同

ブラットを追かけている忘れもの 同

ブラットでも一度ながめる塔の雲 同

ブラットでさつき見かけたのに事故死 同

ブラットで渡すつもの土産持ち 同

ブラットで親子としての初対面 同

ブラットでことさら目立つ母の雛 同

ブラットまで送って貰う大荷物 同

ブラットで忘れた物を思い出し 同

ブラットの親切旅の連れとなり 同

ブラットで泣かない筈の眼鏡拭く 同

ブラットへお骨で帰る事故に会い 同

故郷のブラット巣立つた時の影もなく 同

ブラット二号もソット送りに來 同

新婚へ出征兵士送るよう 同

ブラットで週間誌読み乗りおくれ 同

ブラットで撒いたはずだが前に乗り 同

バイバイとブラット迄の浮気をし 同

次回題 「恋」

メ切 四月末日

(250) 前川 左 文 字

(一) 前川利雄 (二) 左文字 (三)

(四) 池田市宇保町一七池

田田地四の四〇六号 (五) 大正十

一年八月二十二日 (六) 兵庫県多

紀郡篠山町池上 (七) 電々公社社

員 (八) (九) 恋ならん一つ

ハンガーに撫ねあい (一〇) 俳画

・ 恭 (一一) 有 (一二) 昭和二十

九年四月

(251) 原 田 瑠 已

(一) 原田ルミ子 (二) 瑠已 (三)

(四) 大阪市城東区古市南三

の六 (五) 昭和九年五月十一日

(六) 大阪市 (七) 会社員 (八)

(九) 七人の敵を防げる額で

なし (一〇) レコード音楽・絵画

・ 写真 (一一) (一二) 約二

(252) 山 田 烏 莊

(一) 山田秀一 (二) 烏莊 (三)

(四) 堺市中田出井町一丁六

の一 (五) 明治三十四年一月十五

日 (六) 岡山県総社市 (旧阿曾村)

(七) 南海土建社員 (八) 卅五八

〇四 (九) 凡夫なりされど我には

神とあり (一〇) 旅行・野球・相

撲 (一一) 有 (一二) 昭和六年五

社の黒板



★社の人事異同を三月三十一日に左の如く発表することにした。

▽中島生々庵氏

一身上の都合で副主席を辞任された。多年の労を感謝。

▽北川春果氏

副主席を受諾。近作柳樽欄の共選は従来通り。

▽河野春三氏

新たに編集局に入り、春果氏の後を襲うて編集局長を受諾。

▽人生譜 欄を新設

選者は河野春三氏担当。毎号雑誌を募集し、何人でも応募することが出来る。句数、締切り等募集欄参照。

▽麻生路郎主席の喜寿と金婚の祝賀に就いて海外及び全国各地の柳社並びに柳友諸氏へ――。

路郎主席夫妻は各地の巨豪が大坂の地に集って劇的な祝賀の会を開催してはと言ふ各位の熱誠な

ご好意に感激されて居られますが、編集に全力を傾倒されている主席の健康状態が、大々的な催しにお応えする自信がなく、きりとて諸氏のご好意の大会に臨み感激のあまり、会後の疲労で万一のこととあってはこの一門の方々の心配も無理からぬ点もあり、昨冬からひそかに祝賀の大会を川柳不朽洞会が主体となつて海外から全国各地へ呼びかけ大々的な企画をくりひろげる筈が、目下幹部の方々が改めて案を練り直していられるので、社としても独自の意見を発表することは差し控えている。何れ次号あたりで何れとも決定されることと思うのでよろしくお含みが願いたい。

不朽洞会から

▼本会理事長中島生々庵氏が一身上の都合により理事長を辞任されたので、若本多久志、松江梅里の副理事長ならびに西尾榮、土井文蝶、川村好郎の参事諸氏等が極力留任を懇請したが決意堅く遂に辞表を受諾することになり、次いで其の責を負い副理事長及常任理事が文蝶を残して辞任、三月九日の臨時理事会に於て辞任を認め、直ちに不朽洞会運営のため左記の諸氏を常任理事に選任した。若本多久志、松江梅里、北川春果、川村好郎、土井文蝶、西尾榮。理事長は当分欠員のままとする。(多)

詩的趣味

八木摩天郎

謡曲に十五徳がある。恋わずして美人を思う。行かずして旅を思うの類である。川柳も共通である。愛情、誠、寂しき、真理への探求、自己凝視、自己反省等が入

本
福壽司

心斎橋筋大丸前

電話四三三四番

問性の美醜が見せられる。

よい趣味を持つて伴せてすねとよく人に言われる。詩的趣味を持つ事は伴である。しかし、作句する事は楽しいと大げしき知らぬ人は趣味に同調しない人だ。苦しんで作句して少しでも佳句を得ようとする人の気持ちを知って呉れる人は理解して呉れる人だ。それでは趣味とは何か：辞書を引くと、あじわい。おもむき。風趣。風致と言ふ事だそう。

おもむきと言ふ事だ。風韻とも情趣とも言ふらしい。おもしろみはどんな物が、詩的

趣味とはどんなものかと口に言へぬ不思議な力を持つて居るが此の趣味は要するに、自身の感情を愛信者に伝へて媒介する一種のもので、形もなければ影も無く只霊腕に依つて常に奇妙な不可思議の活動するものらしく喜怒哀楽、交の感じを与えるそれが詩的趣味らしい。

趣味と言うと字訓から言うとうだ人の口にせぬものを走って取るのだそうだが句を集めて味うのも、物走って人より先きに取つて自分の楽しみ、おもしろみを味うのも趣味だ。

同じ川柳の趣味を持ち、同じ作句の喜びを持つもの同志の心に通う一種不可思議な心の繋りが、百年の知己のような心の親しさ、睦みさ、それは、同病相あわれむような一種特別の物だ。

同じ川柳系句会が各地に沢山ある。海辺もあれば山村もある。稀らしい風物、

景色、名所旧蹟に柳人を春秋交流して作句し、批判し、お互いの隠し芸も見せて、交流し合うのも亦快ならずやと思ふが如何に。これは前述のように、おもしろみ、あじわい、おもむき、趣味の生活、川柳の徳でもあらうか

新刊紹介

記者と学者の間

文学博士 井上吉次郎著
井上博士喜寿記念出版の「記者と学者の間」が昭和三十九年三月二十五日に井上吉次郎博士喜寿記念出版刊行会(大阪市大淀区本庄川崎町大阪高速印刷KK内)から上梓された。書名が示すように、博士は豫備界と学界に跨つて活躍された特異な存在である。従つて本書が喜寿記念出版として型破りであることもうなずけよう。A5版四九七頁。(非売品)

宝塚歌劇50周年記念

毎日新聞社主催



美しき日本博

開催中・5月31日まで

世界に誇る日本の伝統美をここに
2億の巨費で最新の遊戯機を新設
入園料 100円・小人50円

宝塚ファミリーランド



川柳

名句抄の鑑賞

麻生路郎

〔一六〕

尼僧一人アベック多き坂下る

(孝風)

若い尼僧が静かに坂を下って来るのに出会って、作者はフト尼僧の過去をおもい想像を逞しくしたのである。

観光かハイキングかは知らないが、この坂はアベックの多いところだが、そのアベックに出会った尼僧の心に過去の悩みがよみがえりはしないだろうかと思んだものが、それは風のないところに風をおこすようなもので、第三者の想像に過ぎないかも知れぬ。しかし、世間はそうした詮索をしたがるものだからネライとしては面白い句だ。表現も淡々としているのがいい。

〔一七〕

春うららボンボンと盲判

(素身郎)

ボカボカと暖かくなって、花のたより

が、あちこちから。

飛行機が墜ちようが、観光バスが横っ倒しになろうが、それは余所の話とばかりに、仕事なんかは上の空である。

「連休を狙って、二泊三日の旅も悪くはないなア。しかし、財源をどうするかが問題だ」と、首をヒネリながら、ボンボンボンと盲判というところか。

〔一八〕

母の死

目があきはせぬかと白布又外す

(東岸)

ありのままを詠んだ句だが、実感は強い。技巧も何も要らない。

「〔臨終です〕と医者が立ち去ってからも、みうちのものにとつては、まだまだ生きていような気がするものである。

私はこの句を読んで、おもわず涙を催した。一篇の哀詩である。

〔一九〕

西成界わい

刑務所帰り大きな鯛で迎えられ

(満潮)

「大きな鯛で」の中七で、ボスのムショ帰りを思われる句だ。ヤクザの世界では大物になると、まるで凱旋將軍を迎えるような騒ぎだ。貫祿によつては伴陸氏あたりから祝電や花環などが贈られるかも知れないが、そこまでは知らぬ。

〔二〇〕

猫ババの本能少々もち合わせ

(みのる)

はじめから、そんな気はなかったが、つい鼻の先に転ろがっていたので、金銭でも掘りあてたように、猫ババをきめてしまったのである。

猫ババという言葉はイヤな言葉だが、誰でも多少は持ち合せている本能らしい。それをオレも少々持ち合せていたのである。魔がさしたというのであろうか、教養もだいなしであるという自己批判の句として面白い。

〔二一〕

人品いやしからずパチンコ屋でねば

(恵二期)

パチンコが健全娯楽だなんて笑わせるが、敗戦後の虚脱状態を救うのに一ト役買ったと一部の人達には思われている。一時は、イヤ今なお大学の教授あたりまでが、チンジャラジャラに夢中なので、このような句が詠まれたのである。

「人品いやしからず」と、突如としての措

字が、パチンコ族を表現するのに、あまりにもふさわしくないの、おもわず微笑を洩らすのである。

〔二二〕

病床は問わずも葬儀委員長

(豊子)

財界や政界で多少とも知られた人が亡くなるとその方面のお偉方方に葬儀委員長を頼むが、その人選はなかなかむづかしいものだ。故人ともっとも親しかったとか、病床につきっきりで世話を焼いた人が必ずしも葬儀委員長に選ばれる訳のものではない。この句の示す通りで、多くの場合、病床を一度も問わなかった大物が葬儀委員長としてまかり通る。それを不思議とも思わないのが世間だ。

〔二三〕

教養が邪魔していると思ひこみ

(水客)

誰でもうぬぼれはあるものだが、就職がうまくいかぬと、大学出の履歴が邪魔しているように思い込んだり、縁談がはかばかしくいかぬと、女子大を出たので敬遠されているように思いたくなるらしい。原因が案外手近かにあることに気づかず、徒らに教養が邪魔しているように思い込むのも近ごろの教育第一主義が災いしていると言えよう。

〔二四〕

どう寝ていたのかあの部屋にピアノ

(七面山)

この句を読んだとつさにニンマリせざるを得なかった。

近ごろでは長屋の住人であろうが、アパート住いであろうが、猫も杓子もピアノ熱に浮かれ、あの奥さんがあの娘さんとと思われるような人たちの指先きから、いとも妙なると言いたいが、ボロンボロンの音響が戸外へ流れ出る凄じさである。

この句は、そうした人たちの部屋をのぞき見た社会批判として多少の誇張はあるが面白いと思う。

〔二五〕

私鉄スト春が来た来た春が来た

(柳宏子)

年中行事の春闘だもの、例によって鉢巻はするが、さしたる感激もない。したがって、何等の悲哀感も件なわぬ。世間からも又かと思われるだけになった私鉄ストになった。

スト中止も予定の行動だ。それまでは雀友を誘うて、ハイライトをブカブカふかして待期するに過ぎない。賃上げをかつとったところで、一回の連休でフツ飛んでしまう端した金だ。

〔二六〕

ころんだ子起さぬ育児法とやら

(むじな)

私たちのこどもの頃は、一にもしつけ、二にもしつけで、アタマを押えつけてまでお辞儀をさせられたものだ。それが育児法の初歩だったが、近ごろのママさんはこの句のように、悪く言えば放任主義で、アタマを押えてお辞儀さすようなことは決してしない。

この句は育児法批判として提出されたよ

うな句だが、どこまで、こどもの自主性を尊重すればいいのか、考えると、むずかしい問題だ。

〔二七〕

女やがては一糸まとわぬ様になりやせんか

(雄声)

女性の勇敢さは、時代と共に、何等はじょううこともなく、腕はニユツと出す。脚は太股から遠からぬところまで露出する。人によっては、職業によっては、肌も出せば乳房も出す、イヤハヤこの作者のいうように「一糸まとわぬ様になる」のではなからうか。

それこそデパートのマネキン人形を裸にしたような世界が出現することであろうとお可笑しくなる。

〔二八〕

祖母頑固灯明だけは電化せず

(光郎)

おじいさんより、おばあさんの方が、頑固だと言つては、おばあさんから叱られるかも知れないが、北国あたりの堅門徒のおばあさんには、どれほど便利であろうとも、お登明の電化はガンとして受けつけないのである。そこをつかんだのがこの句の面白さだ。

〔二九〕

質草の種を月賦で又仕入れ

(花村)

「もののもふ困れば質をおくの手の、エイ、ヤットウと受けつ流しつ」という狂歌があるが、一寸金に困まると質をおくということは昔も今も変りはないらしい。

この句は質をおくネタを次ぎ次ぎに月賦で仕入れたという時代相を指摘したものだ。とどの詰りは月賦の支払に窮し、ガスのクダを喰えて一家心中の悲話となるのがオチかも知れないが、そこまでは詠んでいない。

〔三〇〕

老眼で入れ歯でしかもはしめめで

(没食子)

老人を忌憚なくやつつけた句だが、すべての老人が、みな皆そうだとは言えない。「オレはまだ老眼ではないよ」「オレはまだ義歯ではないよ」「オレはもう女には手は出さぬよ」という老人の存在することも認めていいだろう。しかし消えかかったロースクの灯のように、多少の色気が、ゆらゆらとゆらめいていることは否定出来ないであろう。

〔三一〕

春うららこんな日和に袖カバー

(一瓢)

春の陽が惜しみなく事務机の上に渦巻いている。たいたいた用事がない日でも、カマボコ生活ではどうにもならぬ。窓越しにアベックの嬉しそうな姿を見る。つづけさまに欠伸が出る。天気晴朗さえ恨めしくなる。ひけるのを待ちかねてバチンコ屋へ走り込むことであろう。下積みのサラリーマンの悲哀が遺憾なく詠

まれている。

〔三二〕

売っという後は野となれ年賀状

(好祐)

お役人の商売の標本みたいな毎年郵政省が売り出す年賀状へのきびしい批判句だ。この句を見せられたら郵政大臣も苦笑しただけではすまされまい。

〔三三〕

博文をもう疑いの目ですかし

(みのる)

ニセ千円札は日本中のボリスの悩みだったが、未だに犯人があがらない。そこで新千円札の出現となった。髭がゴマ化せないとか言つて、聖徳太子が維新の元勳伊藤博文にかわった。それで安心だという訳ではない。この句が、それを指摘している。軽い穿ちの句だ。これからの博文さんはタバコ屋のおばあさんにまで疑いの目で見られることであろう。

(続く)

新発売 65円



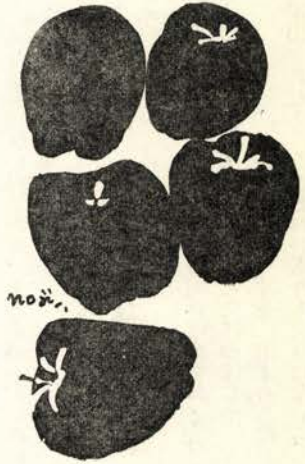
アサヒ
スタイナー

ビールのワールドタイプ

集路一

選者

里星洞 梅白水 江根村 松山木



一と筋

松江梅里選

一と筋に生きる望みを子に託し 古心
素直さがあって一と筋笑われず 弘朗
夫唱婦随ただ一と筋に五十年 旭峯
君一と筋と言える若さがうらやまし 圭水
一と筋に生きて見返す夢があり 静水
一と筋に歩めと諭す師の慈愛 藤波
余生まだ一と筋おもう人があり 弥生
一と筋な恋を近松しいたげる 和三郎
一と筋縄でゆかぬ男が敵になり むしな
一と筋の煙むが絵になる里の秋 代仕男
一と筋の恋はこころの底に秘め すみれ
人間の彼一と筋の畔でもめ 雄々
一と筋に信する妻へまだ醒めず 一峯
のんびりと糸一と筋で釣るレジャー 句葉坊
十八九一と筋縄で追えぬなり 木魚
一と筋の恋浮彫りにするドラマ 愛鳩

馬車馬の眼は一と筋に進むだけ 涼人
一と筋にうち込む芸が世に疎く 滋雀
一と筋のこころを金で賭みにじり 井蛙
一と筋を通して頑固者とされ いわを
一と筋のテープに通う恋ごころ ひろし
一と筋のみち農業を離れさせ 可住
ベテン師のうそ一と筋の幕を閉じ 春己
一と筋の恋に破れた娘を案じ たけお
一と筋に生きてわびしい文化財 保夫
失恋が芸一と筋の人に変え どんたく
一と筋にかなわぬひとを想いつめ 宗太郎
言い勝って涙一と筋女なり 光郎
あみだくじ一と違筋いで走られ 季鳥
一と筋に思う向うが道をそれ 晃男
人間国宝鑿一と筋に瘦せ細り 恵二朗
黙舌一と筋縄でない構え 同
一と筋の紐であやつる猿芝居 雄声
一と筋でいけぬ田舎の小あまい 同
一と筋になって小句腹が切れ 淀月

一と筋のザイルに命支えられ 同
おくれ毛の一と筋風がもてあそび 生薑
一と筋道なんでもうしろ振りかえり 同
一と筋でゆかぬさぐりの端を突き 九呂平
一と筋に余世を耐えて子に生きる 同
紫煙ひとすじ商談の客はまだ 静波
一と筋は嫉妬も入れてヤミ編 同
一と筋に剝いた林檎をほめちぎり 同
一と筋の涙話題をかえさせる 宗義
一と筋に愛してまよとはばかり 同
一と筋に思いつめたをあぶながら 同
一と筋に生きて雑音しりぞける 十九平
一と筋の涙笑くはへ来てとまり 同
一と筋の糸で無気味な蜘蛛が垂れ 同
土に生き土に果てなん轍を振る 恵二朗
地 一と筋の大河歴史のまま流れ 千翁
人 まこと一と筋節くれの指太し 八九寸
軸 一と筋ですがるこころに動かされ

山の宿

山根白星選

空岳の伴奏に沸く山の宿 九呂平
山の宿 いわくありげな女客 どんたく
山の宿から知り合ってボーリング むじな

山の宿 駐在なんら疑わず 保夫
山の宿 膳と一緒に猫も来る 木魚
山の宿 風呂敷包みを下げた客 光郎
山の湯の沸りは妻と耕耘機 光郎
イメージをこわす電化の山の宿 静波
冗談も洒落も判らぬ山の宿 淀月
山の宿 昼間も電気要るトイレ 八九寸
山の宿 上座は熊の皮を敷き 雄々
フィルムが足りなくなつた山の宿 雄声
山の宿 崩れ落ちそなとこに建ち 宗太郎
別館を霧がへだてる山の宿 和一郎
山の宿 違う訛りが妒を囲み 井蛙
山の宿 夕餉は海の幸ばかり 杏花
山の宿 山女の釣糸を借りて出る 生薑
山の宿 商談あとを追って来る 隆子
山の宿 恋の逃避に目立ち過ぎ 滋雀
山の宿 こぶしは今を盛りなる 古心
人 山の宿 詩人氣取りの便り書く 十九平
地 山の宿 ネオンの影にあばずれる 和一郎
天 山の宿 まで来て株式欄を読む 恵二朗
軸 岩風呂へ謎の女が誘うまま

視線

木村水洞選

真実を見ぬく視線で男見るむじな
視線合う拍子にあくびうつされるどんたく
九呂平
功なつて故郷の視線ありったけ涼人
ケーキ切るママの手許に子の瞳万竿
本心ではなく叱っている視線保夫
愛の視線落し穴まで気がつかず辰始
債鬼来る視線を避けて廻り道光郎
愛してる視線を追えば兄の顔句楽坊
はれている視線は左眼で受ける春巳
宿題を忘れた視線下を向き同
ライバルのとげある視線受けて発ち淀月
遅刻して課長の視線重く受け李鳥

瞬間の視線女が女見る同
駅前で拾う財布へ視線寄りろ亭
視線だけ残って船は遠ざかり八九寸
視線まで火花を散らすPTA雄々
見返えしてやる気視線も気にかげす同
愛情を視線の中に見つけたし同
愛情がもつれ視線も他人めき弥生
さよならも言わず視線で送る恋同
一生を賭けた視線に芸の中同
教壇の視線が恐いカンニング静波
視線から逃れ見合の服を脱ぎ代仕男
ライバルの視線を肩で跳ね返し和二郎
笑声と視線は孫の初あるき専翁

譲らないままで視線がぶつかり千翁
雲を追う視線は大志胸に抱き井蛙
良心が愛の視線へ顔を伏せ同
嘘でない証視線へたじろかず同
妻がいる子がいる視線はね返す静水
番犬の視線押売り見て通り卯之助
もう他人ではない視線ためらわれ生薑
ウィングの不覚課長の目と出合い恵二朗
母親の視線が守る広場の子杏花
叱られる視線は畳の目をかぞえ宗義
ハンカチを振って視線を呼び迎え隆子
ライバルの視線の裏にある嫉み旭峯
発言が万座の視線受けて立ち弘朗

先生の視線を避ける席を選び十九平
右左視線あやつりバスガイド滋雀
住
適当にやれり視線が抑えつけ可住
落ちぶれてしまえば視線冷たすぎ弥生
やぶにらみすまじおれば視線それ半月
視線などどうであらうと坂を押し秀峯
年頃になって視線をそらす仲弥生
人
老刑事視線を外らすことに慣れ十九平
緊張の視線はころぶ手術台九呂平
地
天
親と子の視線がゆるる乳母車初甫

明治・大正柳誌巡礼

奥津啓一朗

二月二十五日、むいぎ、第四号、
四六判横綴十二頁、金沢市春日町
五丁目三五、棟木川柳社発行、編
集発行人松本小治郎、非売品。

松本朱格子

差し向い蜜柑の皮の捨て所

内山憲堂（お札に更えて）創

作、募集吟浅田紋二郎選（失業
者）中柳二郎選（前）等が載って

いる。

三月一日、大大阪、一の一、菊
半載五十六頁、大阪市北区老松町
三丁目、大大阪川柳社発行、編集
発行人本田敬之助、一部参拾銭。

塚崎松郎

自動車屋また支那栗の皮を掃き

小須賀幽香

段ばしの中で聞いた門嘶子

本田添花坊
素通りをすれば南地のつまらな
さ

本田添花坊（川柳国より）岡田
播陽（私の川柳観）塚崎松郎（創
作帳から）小須賀幽香（或日曜
の朝）句会詠草等が載っている。

さきに八ふあうすとVに、うか
つにも誌型を三五判としたのは誤
り、訂正します。

昭和四年四月一日発行の第六十
二号で休刊、後日大大阪西區堀江通
一ノ一四、大大阪川柳社研究会よ
り更生創刊号が出た由だが未調。

三月五日、拍子木、創刊号、四
六判、十頁、神戸市兵庫西出町一

五六、拍子木川柳社発行、編集人
広川番翁、非売品。

廣川番翁

潜戸を出る拍子木が首で鳴り
井上剣花坊は「拍子木」に寄す
と題して

神戸は、昔からうまい川柳家
の出るところです。雑誌も気の
利いたのが出て、ちよつぱりと
山椒の味を見せることがあります。
しかし「うまい」と言うこ

とは、時によると、之れで満足
して、進歩をしない事になりま
す。（中略）

「拍子木」と言う命名の意味
は、柳界の木鐸に成ろうと言う

ツモリと拝察します。果してそ
うであれば、責任は重うござい
ます。他の情眼を覚ます、と言
う事は、拍っておる自分から先
ず緊張してかからねばなるまい
と思います。

うまい川柳家の多い神戸、気
の利いた雑誌の出る神戸が真剣
に、鈍重にやったら、恐らく関
西一の川柳国となる事が出来ま
しょう。

同人は小原一閃、川本皎月、高
川むつみ、永見瓢子、広川番翁、
樋口奉峯、顧問井上剣花坊。

筆 隨 話 繋 金

★

麻 生 路 郎

どうの、家相がどうのとは言えないのである。そんなことを言っているのは、広い大阪に一軒の家も見つからないからである。

戦後、女性で株をやる人が多くなった。株式屋が、奥様のへそくりをねらったのが当った訳だ。女性がしきりに経済新聞をのぞきはじめた。

鼻糞の株で見ている相場欄

(草 右)

や、

株少し持って哀れや気が小さし

(矢 寸 志)

や、

買いました下りました五百株株主

(妄 夢)

という川柳が生れたのも、その頃である。

物の不足というものは面白いもので、大戦当時、あらゆる物資が不足して米が配給になる、衣料切符がなければ足袋一足、手拭一本すら買えなかった。ビール一杯、タバコ一箱にすら行列をつくったものである。そうになると、商人が高姿勢になり、何一つ欲しいと思っても容易には手に入らなかった。

(五)

川柳に

自殺した部屋でも権利金とる世

というのがある通り、戦後の住宅難では、

どんな貧弱なボロ家でも権利金を出さねば手に入らない。私の並びの家で、首吊りがあつて畳に汚点が残っている家でも、すぐ

に権利金を出して引っこして来た。方角が

川柳不朽洞会

(三月)

指 導 麻 生 路 郎

賛 助 長 谷 川 一 徹

中 村 祐 吉

田 中 辰 二

岩 崎 愛 二

中 村 直 勝

麻 生 磯 次

井 上 吉 次

島 浦 精 二

恒 藤 恭 二

前 田 勇

洞 友

田 村 孝 之 介

山 本 雨 迷

山 路 閑 古

柴 谷 宰 二 郎

麻 生 腹 乃

橋 本 緑 雨

高 鷺 亜 純

沢 田 四 郎 作

東 野 大 八

中 島 紫 痴 郎

戸 倉 普 天

奥 村 丹 路

不朽洞会員

特別会員

中 島 生 々 庵

上 田 翠 光

戸 田 孤 浪 方

西 尾 市 場 没 食 子

土 井 文 蝶

若 本 多 久 志

川 村 好 郎

松 江 梅 里

正 本 水 客

黒 川 紫 香

若 柳 潮 花

小 西 無 鬼

西 井 無 鬼

八 木 摩 天 郎

北 川 春 巢

寺 井 鋭 々

古 川 麗 花

前 山 北 海

三 輪 峯 園

大 坂 形 水

井 上 湧 三

西 垣 錦 風

築 山 快 夢 起

市 岡 曉 舟

藤 本 満 年

羽 佐 周 柳 葉

福 田 安 夢

吉 田 圭 井 堂

国 広 半 休

長 淵 井 蛙

友 田 貴 山

太 田 良 山

直 原 七 面 山

河 村 日 満

足 立 春 雄

石 川 侃 流 洞

安 岡 珊 枝 郎

牟 田 一 哲

河 村 瑞 川

木 村 千 容

野 村 味 平

木 村 水 洞

福 田 一 丁

真 鍋 白 瓢

佐 野 白 志

後 藤 梅 志

平 尾 太 希 志

木 口 賀 峰

小 西 雄 々

菊 田 い さ む

山 川 阿 茶 々

岩 崎 一 伸

金 井 文 秋

伊 藤 茶 仏

那 谷 光 郎

中 島 小 石

福 井 野 迷 路

麻 生 ア ー ト

大 西 八 歩

石 曾 根 民 郎

布 施 根 筑 川

桜 田 久 米 雄

浜 田 小 松 園

清 水 恒 明

新 川 恒 也 助

水 谷 柳 莊

弘 谷 湖 山

杉 田 耕 民

増 野 占 葉

佐 野 史 由

小 沢 喜 水

大 鶴 喜 水

野 本 文 月

小 林 晴 峯

野 村 文 峯

飯 降 白 星

西 辻 竹 青

林 野 魅 光

阿 万 柳 的

岸 南 柳 的

黄 瀬 美 秋

福 島 鉄 児

青 木 遊 星

服 部 十 九 平

大 森 娘 句 菜

長 谷 川 三 司

若 林 草 右

浜 畑 湖 蝶

益 永 貞 女

山 田 季 賛

山 田 鳥 莊

梶 原 一 善

田 村 藤 波

白 井 三 林

下 山 清 坊

松 川 杜 朗

それでいて、時には世間の人の真似も出来ない寄付をやっているののであるが、それは新聞記事になるような場合に限るので、近所から、ささいな寄付を頼んでも、そんな寄付には一切応じられないので近隣から至ってうけが悪いそうである。しかし、子どもには財産を譲らぬと言われているから、何れこの老人の全財産は公共事業に寄付されるものらしい。その全財産は市役所の役人の概算でも四十五億は下るまいという話だが、それよりも、もっともつと多いという噂もあるし、おそらく当の本人さえ全財産が、どれくらいあるのか、知らないだろうという話だ。この老人のめつさは誰も彼も舌を捲いているが、そのめつさが、この老人の金に対する哲学なのであるから、おそろしい話として聞いておくより仕方ないだろう。

由来、株というものは投機 (Speculation) の目的だけに、すこぶる危険なもので、賭博との境界線さえハッキリしないものであるが、それは先き物の話で、この老人のように、キツ儲かるに決っているやり口では、株をやっているとは言えないのであるが、この老人にとってはそんなことはどうでもよいのであろう。

斯うして、金に繋がる話は幾らでもあるが、この老人とは全く類を異にした人のあることも知っておくのもムダではなからう。

私の岳父の昔村は亡くなってから三十五年になるが、至って律義で質素で乃木將軍っそくりの風貌であった。数学の教師で世

を終ったが、俳句もつくり、川柳も作った。曾ては渡辺霞亭の門下として、霞亭の時代ものの小説の代作などもしたこともあったが、もともと教員出なのである。

明治十七、八年頃、すすめられて、百円の終身保険の契約をした。その時の教員としての月俸が三円であったから、百円は自分の葬式料として十分な保険料だった。そして明治、大正、昭和と月々に十七銭五厘ずつの掛金を掛け、昭和五年十一月に亡くなるまでには掛金が保険料より遙かに超過してしまつた。しかも、僅かな掛金を受取りに来るのを気の毒がって、掛金を上廻る外電車賃や市電代まで払って保険会社へ掛金を持参していた。昭和五年に亡くなられたので、翁の相続人に代って私は保険金の百円を受取りに行ったが、貨幣価値が、明治の十七、八年頃とは全然変つていたので葬式料である筈の百円は何の役にも立たなかつた。斯うした社会の矛盾に対して、むしろ腹立たしささえ感じたのであつた。朝から晩まで、金、金、金で人生に終止符を打つ人と、金には全く恬淡で、律義で質素で世を終わる人と、何れが幸福か、それはその人々の選定にまかしたい。

(終)

バック・ナンバー

本誌のバックナンバーの株が天井知らずに上つていますが、趣味的に製本される人達のために出来るだけサービスしますから、この機を逸せず在庫の有無を往復ハガキでお問合せ願います。

馬場夢生	村上ゆづる	森本泉水	小池しげお	竹内圭三	浜野奇童	橋本幸男	高崎雄声	高橋操子	藤井明朗	永松東岸	野田素身郎	永藤弥平	神谷凡九郎	清水望峯	伊達堰子	坂田東洋男	志水礼司	酒井ひか平	深見雅堂	松下京一	津秋六花	丸川初甫	恒野旭泉子	新岡回天子	池田古心	石居高志	早川清生	西出栄	酒田清子	平井井平	阿部柳太	西田柳安子	辻岡圭水	松岡恒雄	中松与志	児島与志
野々口美舟	小浜牧人	菱田満秋	前川左文字	平田三郎	西尾青一路	橋高薫子	多村はなみ	山田伊三郎	宮口笛生	榎本露児	石坂新雪	城川吾柳	西川晃柳	田中蛙眠子	野田一	山本立兒	林葵丘	仲どんたく	久家代仕男	本多柳志	原独仙	大谷月都	江国幽谷	光好陽子	河相すむ	野呂鶴汀	樋口舟遊	高野むじな	辻白溪子	吉原紅月	竹内千里	石倉旅風	魚住満潮	田中狂二	村上旭童	
福田多可志	森田若人	岡嶋芳道	北村三歩	木島静馬	中谷ハナ子	村山光輪	野村保美	平沢愛論	森下客遊子	植村客遊子	河井庸佑	小島孝夫	藤村鳥雀	田中好祐	高津徹也	横紫光	工藤甲吉	伊原明林	梶谷冬生	小林孤呂二	舟木与根一	林夢紅	杉前南宗	今西生薑	室井八九寸	川竹松風	内海敬太	横山一声	関戸宗太郎	高山涼髪	安平次弘道	渡辺曉童	平田実男	井阪東天	高橋尚史	
辻川喜仙	浅野芳朗	川阿露子	石井かん	杉本一鶴	本多清人	浅藤八郎	内藤きさ	木村涼人	城島京舟	牛島水京	唐崎専翁	奥谷弘朗	藤岡花梢	岩田美代	松本吉太郎	置田ふじ	遠山可住	河原みのる	隠岐不醉	田中敏行	伊集院良保	清水一男	中川晃男	柳楽鶴丸	都倉求女	大江秋石	中塚礎月	松田半水	越智一水	森川すみれ	細呂木魯木	高木桃里	小林孝正			

柳界展望



金子春風氏の句碑が貝州上田公園内に建立「故一ツ伸びゆく
街の灯を見つめ」と金子春風氏夫妻

句会
▼本社四句会は七日(火)午後六時から千日前電停前自安寺で開催。春宵一刻を俳句の醍醐味に浸るよう柳友お誘い合わせの上多数の出席をお願いする。
▼七面短詩文学クラブ川柳部三句会(和歌山市)は四日(水)午後六時から奥新和歌の浦、魚又楼で開催。
▼南海電鉄句会(大阪市)は三月十九日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。
▼大萬川柳十三周年記念大会(大阪市)は三月二十九日(日)正午から阿倍野区松崎町三ノ一〇禦烹大萬で開催。以上路郎主幹出席。
▼川維下関支部一杯水川柳会如月句会は路郎先生の平癒祈念句会に切り替えて三月二十三日中村九呂

平居で開催。
▼川維岡山支部二月例会は二十一日岡鉄クラブで開催。
▼浜田久米雄退職記念句会は四月二十六日(日)午後一時から岡鉄クラブで開催。兼題は勇退(久米雄選)・春(方大選)・故郷(七面山選)・制帽(東岸選)・汽笛(正一選)。
▼鈴木可香氏還暦祝賀句会(名古屋)は四月八日午後五時から桜天神社社務所で開催。
▼読売越路時事川柳大会は昭和三十九年四月五日午前十一時から北魚沼郡小出町こまいぬ荘で開催。
▼第四回愛媛県下川柳大会は三月二十九日(日)午前十時から伊予三島市紙業会館で開催。
▼第六回近県川柳大会(長崎市)は長崎川柳社・長崎川柳協会主催

▲食満南北翁を偲ぶ会が堺市文化団体連絡協議会主催の下に、七

大会を三月十九日三井健保会館に於て開催。

▼第九回郷賢祠祭奉賛川柳大会は三月十五日東京院に於て開催。

▼川岡雪眼子氏(諫早市)は諫早三大風致地区の一つを手に入れ霊眼堂を建ててから七年、この程植

の下に、五月二十四日午前十一時から雲仙の有隣荘で開催。兼題、尾灯・みどり・蜂・ビデオテープ・峠・大空・墳輪・不知火(各題三句吐)。会費五百円。

月六日午前
十時から堺
市の南宗寺
(飯塚線御
陵前下車)

廣徳社創立十五周年川柳大会(熊本市)二月十六日



支部長八木摩太郎氏が世話役として参画されている。

消息

▼小西無鬼氏(兵庫県)から「二月号」を拝見、先生のご不例の様子に大変驚いております。その頃より私も風邪気味にて身心けだるく仕事の意欲も衰え、休養する時間さえない始末で、お見舞状も出さず失礼申し上げております。また、恩師の温いお心使いに溢れる書信を頂戴し、胸に沁みました。

▼丸紅川柳会(大阪市)では指導の川村好郎先生と共に三月二十二日に京都の嵯峨、嵐山に吟行をされた由。

▼工藤甲吉氏(青森市)は二月二十五日東京、二十六日は唾三味居を訪問、迷亭・笛我諸氏と歓談して午後四時の列車で帰青された。雑誌で先生の病状を知りびっくりしています。一日も早く全快して金婚喜寿の日をお迎え下さいと。「東京の雪は冗談めいて降り」

▼川柳名古屋三百号記念川柳大会は三月十五日東京院に於て開催。

▼菊沢小松園氏(大阪市)は自営の工場、住居を鉄筋三階建に新築された。

▼第九回郷賢祠祭奉賛川柳大会は三月十五日東京院に於て開催。

▼川岡雪眼子氏(諫早市)は諫早三大風致地区の一つを手に入れ霊眼堂を建ててから七年、この程植

青キヤップ
銘酒



白牡丹

180ml

40

中味

摂津酒造

空ビン引取10円

不朽洞の人々



千石荘で斗病生活の杉本一倫氏

斗病十五年医学の底をついて生き

(一) 鶴

私は現在キリストの十字架の愛に触れ、渇きに渇いた魂が永遠に生きる命の水を与えられている。同時に人間として真理に生きる道を啓示され、権力に媚びず滅びゆく魂を一人でも救いに結びつける使命を残された生涯だと思ひ、主のみ旨のままに歩みたく思っている。

転居

▼飯降白香氏(奈良市)は奈良市菅原町一〇六の二モデル住宅内に転居された。
▼野村味平氏(加賀市)は加賀市大聖寺耳間山三六番地に転居された。

電話開通

▼森下愛論氏(布施市)の自宅に電話開通した。七八二局七〇八五番。

木屋土工などを入れて手入れをしています。ご先生夫妻のお祝いの会には是非参会したく思っています。「御いのち起きよと炬燵に時計鳴る」

▼平野光道氏(仙台市)は二月号近作柳樽の巻頭を飾らせて戴き、予想もしていなかったこととて驚きかつ喜びました。

▼後藤梅志氏(大阪市)は新春以来前立腺肥大症で難渋されていたが、二月十一日大阪府立病院で手術、引き続き二階二九一〇号室で加療をしておられるが、経過順調で近々退院される予定である。

▼河野春三氏(大阪市)は三月十八日午後、下朽洞を訪問、路郎主幹、夢乃女史、薫風子らと懇談された。

▼高木夢二郎氏(東京都)の主宰の「川柳人」では四月が井上信子さんの祥月に当るので追慕の意を表して同人や会員の自選句集を特集すること。

▼江国幽谷氏(津山市)は昨年十月から五カ月間病床にあり難渋しておられると。全快の一日も早くらんことをお祈り申し上げる。

▼隠岐不静氏(姫路市)は三月下旬、出雲大社、玉造温泉、三朝温泉と山陰の旅をつづけられた。「懐と相談をしてとる料理」の句を寄せられた。

▼戸田古方氏(豊中市)は夫人が三月九日入院されたので、家へ帰っても落ちつけないとのこと。入院四日では峠は越したらしいとのこと。一日も早く快癒されるようお祈りしている。

▼橋本緑雨氏(大阪市)は三月十七日から七泊八日の九州一周旅行をされた。

▼河本南牛史氏(松山市)は大正十五年より休刊の「川柳くろかみ」を再発行すべく尽力しておられる。

▼九川初甫さん(芦屋市)は三十余年の鉄道生活を三月三十一日限りで勇退され、趣味の川柳といけ花で余生を楽しまれることとなり「退職の記念時計よりつつけ」「国電へ今日から客の顔で乗り」の句を寄せられた。

▼長谷川鮮山氏(名古屋)は金子香風氏建碑祝賀に出席して戸倉ホテルから同行者と寄せ書を寄せられた。

▼渡辺曉童氏(愛媛県)は四月に松山の川柳大会に参加、目下は教育委員の南九州旅行への楽しみを頭に入がながら忙しかっている。

三月十四日には五番目の孫が誕生、愛媛の名が示すようにオール媛ですとのこと。およろこび申上げ。

▼七カ年余の辛苦の星信用金庫支店新築移転の目的達成しましたので、三月二十三日岡山の宿舍から三十六年半の鉄道生活におさらばをした久米雄様の退職にショックを受け、俄かに辞職を思い立ち三月を以て辞職することにしました。これから遊ぶ友を求めて少ない余生の安息を志しています。

▼私は三月二十日から二十二日まで三日間、母と水入らずで鳥取砂丘、三朝温泉、東郷温泉へと山陰の旅を楽しんで来た。東郷湖は静寂そのものだった。「東郷湖夕日所を得て沈む」柳 誌

▼「川柳はこだて」三月号は百五十号を記念して、誌上大会発表号として昭和三十九年三月一日函館川柳社から発行された。

句碑

▼金子香風(上田市)句碑が昭和三十九年三月八日建立除幕式が行われた。句碑は上田城跡の上田公園の一角、烏帽子山が見える風光絶佳の地に建ち万人に安らぎを与えることとなった。「城一つ伸びゆく街の灯を見つめ」

▼故前田佐健(松山市)の第十一番目の句碑が生前の佐健居文閣に建立された。「考えを直せばふつとでる笑ひ」

慶弔

▼若本多久志氏(豊中市)の令息芳彦氏は三月十五日菊沢小松園氏四女百合さんと華燭の典を挙げられた。お慶び申し上げる。

▼三橋兎登子氏(横浜市)は昭和三十八年九月二十九日に亡くなられた由。病名その他詳しいことは判らない。謹んで悼む。

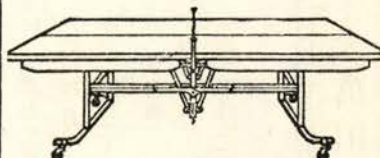
▼山崎花の家氏(金沢市)が昭和三十八年九月十三日に脳溢血のため急死された由。享年五十三才。謹悼。

新機構

Delica

デリカ卓球台

簡単にたためて
手軽にうごかせ
どこでもつかえる



福井工業株式会社

第百五十七回

大萬川柳

兼題

「きもの」

入選発表

選者 麻生路郎先生
 投句総数 五百十二句
 入選 五十一句

米子 新雪

縁うこともたまたま出来ぬ嫁をより

慶之助

ひとさまのきもの縫い縫い縁遠く

岡山 葵丘

つぎはぎのきもので祖母は煙をうち

大阪 洋敏

老嬢の哀れはきものばかりため

豊中 夢虹

十六を女にみせるのもきもの

布施 清人

きもの着る父は雅号で呼ばれけり

八尾 福郎

形見分けのつむぎが似合う輪となり

和歌山 木魚

きもの着たBG早退願ひ出る

大阪 庸佑

やんわりときものの柄をくさされる

西宮 牧人

振袖でマ子とトン子も卒業し

笠岡 忠三

奥さんにきものを着けて外遊し

日塚 一鶴

振袖で叩く仕草も京舞妓

西宮 多久志

きりもんと言うてお家は八十五

大阪 春楽

着替えたは散歩でないと犬も知り

米子 雄々

洋間でも寛ぐときはきものを着

笠岡 遠二

恩給で食べて着ながし羨まれ

大阪 良

ただひとりきものを着ない脚線美

大阪 晃

夫よりきものの方を大事がり

大阪 柳志

喫いさしをたもとへ仲居酌ぎに立ち

倉敷 方大

反抗期きもの着せればおとなしい

大阪 美房

片袖を濡らして京の夜にとけ

松原 万竿

べべべと思ひやれる女の児

きものより服にかぎると祖母の夏
 女子選手きものも入れて羽田発ち

大阪 一栄

花嫁の個性活かした色直し

大阪 文秋

碧い眼のきものも混じるお茶の席

大阪 藤波

脚線に自信がなくてきもの好き

岡山 藤波

日本語も上手和服も着こなせて

羽曳野 静波

墨染めの袖からちらり緋がこぼれ

仙台 光道

先妻のきもの見るたびあたまたに來

きもの着るまでノック待たされる

タイトスカートはいて草月流習い

着物ないからとお花見へも行かず

たまさかのきもの病氣かと聞かれ

たまさかのきものやたらに写される

きもの着る母のこなしは京育ち

参観日きもの半日着た疲れ

別れ話金もきものも出来た頃

帯紐を解いて寛ろく旅がえり

先生の和服へ女生徒どっと沸き

春柄を猿にも縫うて猿まわし

氣にそまめ見合きものを着てくれず

きもの着て奥さまらしくなった姉

きもの着て奥さまらしくなった姉

きもの着て奥さまらしくなった姉

きもの着て奥さまらしくなった姉

きもの着て奥さまらしくなった姉

きもの着て奥さまらしくなった姉

きもの着て奥さまらしくなった姉

きもの着て奥さまらしくなった姉

きもの着て奥さまらしくなった姉

きもの着て奥さまらしくなった姉

きもの着て奥さまらしくなった姉

きもの着て奥さまらしくなった姉

酒 清



灘・魚崎

金露酒造株式会社釀

大萬川柳ベストテン (三月現在)

- 一 きさ子 四、五 岸和田
 二 弘朗 四、〇 倉吉

大 生 薑
 きものではバレると芸者服でくる

岸和田 きさ子

人形のきものも吾れも裸せにけり

大阪 野迷路

何を食い何を着んとて今日も暮れ

びちびちとして大原女のすがすがし

(人)

豊中 夢虹

春宵のことさら袂の重とうて

(地)

玉島 千翁

助かった気持をたたむ借り衣裳

(天)

倉吉 弘朗

家に居てこれはごろごろするきもの

三 千翁 三、〇 玉島

四 野迷路 三、〇 大阪

五 夢虹 三、〇 豊中

六 慶之助 二、五 堺

七 梅里 二、〇 大阪

八 真奇 二、〇 笠岡

九 静馬 二、〇 神戸

一〇 光道 二、〇 仙台

一一 静波 二、〇 羽曳野

一二 藤波 二、〇 岡山

一三 文秋 二、〇 大阪

一四 一栄 二、〇 大阪

一五 万竿 二、〇 松原

一六 美房 二、〇 大阪

一七 生薑 一、五 大阪

一八 方大 一、〇 倉敷

一九 柳志 一、〇 大阪

二〇 晃 一、〇 大阪

以下略

次ぎの兼題 「平和」五句以内

切 四月十日

発表 四月二十日

五月の予告 「静養」

切 五月十日

発表 五月二十日

投句先

大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇

大萬川柳会

老地柳壇

投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社三ヶ月句会 (大阪市)

3月6日 午後6時
会場——千日前 自安寺

法燈ゆらぐこ自安寺、川柳の心の灯も、法燈のように、いつも燃え燃えて、作句に意欲を燃さねば、「佳句」が生まれないとは、臨師匠の教示されるところ。本社の三ヶ月句会での川村好郎氏は、故武部香林氏・故崎崎豆秋氏の在りし日を偲び、川柳道に熱心だった故人を讃え、親が子を愛する、その愛情で後進をみちびき、共に川柳にとけ込め、熱と力のある柳話、会場を庄するばかりであった。続いて席、兼題の披露に移り、本月の不朽洞杯は不肖摩太郎が頂くこととなった。閉会九時半 (摩)

出席者——路郎、圭井堂、すみれ、美房、井平、一舟、摩太郎、滋雀、句楽坊、有子、八郎、白溪子、たつみ、文秋、専翁、柳志、いさむ、南宗、好郎、メ女、薫風子、清子、喜雄、すむ、瓢太、水京、玲人、静馬、天樹、舟遊、四郎、吉太郎、花梢、トメ子、清人、金莊、進之助、庸佑、みさ子、白柳、季賛、栗、腹

乃、宏子、

兼題「花聲」

清水白柳選

花聲と言ふ名が俺をだまらせる 宗義
花嫁が美しく過ぎて引きたたず 野迷路
悪友のスピーチ花聲つるしあげ 静馬
花聲のいたいところにもちよつとふれ 庸佑
花聲の過去の一切言わんとく 八郎
花聲の五尺ちよつとが玉にきず 圭井堂
二寸程背丈やりたき花聲よ 薫風子
花聲に背伸びをさせて撮るカメラ 好郎
子の歳の生まれ花聲よく動き 玲人
教え子の花聲となる奇しき緑 句楽坊
花聲のついでに花聲眺められ 静馬
花聲は次男坊でと披露する メ女
祝電の略字花聲丈けわかり 柳志
カメラの前花聲さんははつとかれ 花梢
花聲の抱負を聞けば笑うのみ 清子
花聲のうれしさチップはずむなり 摩太郎
花聲をまともに見たは汽車の中 圭井堂
モーニングぬいだら花聲もう敷かれ 静馬
花聲の酒量正座をくすさない 八九寸
さがしたは私と母の 聲自慢 美房
花聲へ飼育始めの荷を持たせ 滋雀
夕暮れぬ花聲とふれた事ついに無く みさ子
着こなしでない花聲のあの猫背 圭井堂
花聲の只野凡児に似たる 親し 薫風子
花聲に薄く巧まぬ不精罷 旅風
初めが大事やと花聲に智恵をつけ 文秋
汗かきの花聲に母気をつかい 白柳
兼題「むだ骨」 金井文秋選
むだ骨と思ふコネのコネ 宗義
むだ骨と知りつつガラスあわてて見 藤田清子
公僕はむだ足ふますことに慣れ 金莊

出資した店訪ねたら逃げたあと 専翁

兼題「煙突」

橋高薫風子選

冬山の搜索 空し隊を解き 静馬
世話好きでむだ骨は苦にせず 南宗
むだ骨も私の過去の 一頁 清子
むだ骨は折られませんか 水心
傘持って迎えた頃は雨が止み 圭井堂
むだ骨を根気で刑事耐えてゆき 清人
むだ骨へ次の打つ手がもう決まり 白溪子
心易うなつたら貸付また変り 好郎
むだ骨を覚悟で行けば貸してくれ 静馬
むだ骨を知りつつ添書書いてやり 圭井堂
無駄骨へおがまねたので腰を上げ 阿茶
むだ骨に見えて商才生きてくる たつみ
無駄骨でなかつたメスにいのちの灯 天樹
むだ骨を承知で集金 諦めず 静馬
折角をいらぬお世話と叩く愚痴 進之助
良縁と走り廻って断わられ 圭井堂
探す家が見えず重たい靴をひき 摩太郎
根気よく取りに行つて夜逃げされ 静馬
役に立つように仕込んで暇とられ 文秋
兼題「煙突」 橋高薫風子選
煙突男三日目下界の声で降り 繁太郎
煙突も景色 十四 遠めがね 八九寸
煙突の様にうつぶん吐いて見る 野迷路
煙突が動いて見えた流れ雲 宗義
煙突が動いて見えた流れ雲 美房
煙突の煙り見えてから風呂へ行き 南宗
煙突の中へ夕陽が落ちて行く 玲人
煙突が一番知っている社運 清子
煙突が古都のムードをこわしてる 句楽坊
ガス風呂を煙突掃除良くいわず 静馬
煙突のない大阪は成り立たず 玲人
台風のに煙突怖がらせ 一栄

煙突のいるストープをもてあまし トメ子

兼題「くつしやみ」

本多柳志選

タワから見れば煙突背伸びして たつみ
就職はあの煙突の立つ工場 圭井堂
煙突にのぞかれてくらくらしむき 庸佑
煙突があつて値段が折り合わず すみれ
取りこわす箇の煙突しよんぼりし 清子
長屋にも煙突見えぬ台所 喜雄
一本の煙突街中養われ 好郎
母一人子一人煙突のある 職場 美房
煙突に見覚えがタタキを止める 白柳
煙突にも老若男女あり 車窓 薫風子
兼題「くつしやみ」 本多柳志選
くつしやみへすかず CML 三錠 生薑
くつしやみが静寂破った試験場 阿茶
歌麿の女はくつしやみせぬうす着 旅風
憚らず大きなくつしやみ男らし 繁太郎
立ち聞きがうかつかりくつしやみしてしまひ 宗義
そば註文くつしやみ残して門に消え 點平
くつしやみまではれた男に気をつかい 進之助
社長には社長の貫録あるくつしやみ 進之助
空寝からさめるチャンスにするくつしやみ 句楽坊
くつしやみへ又年頃が笑いこけ 進之助
啞でない証憑うれしい大くつしやみ 圭井堂
くつしやみしてからの二人は肩を寄せ 清人
週刊誌ふせてくつしやみの口にあて たつみ
売血に來てるくつしやみを見つめられ 玲人
共稼ぎくつしやみ一つをかばい合い 清人
くつしやみして薄着のままでいる若さ 南宗
誓詞読むその静けさへ出るくつしやみ 圭井堂
くつしやみとも色気芸妓の髪が揺れ 進之助
母なればくつしやみ一つもはつとけず すむ
股火鉢くつしやみが続く守衛室 いさむ
預かった孫のくつしやみえうらなる 圭井堂

くしやみした涙と知らず氣をちかい 一舟
くつしやみをしたのが襟閉めに立ち 花梢
寒稽古くしやみしきる子が一人 いさむ
くしやみしてからは遅いルルをのみ 南宗
くしやみしたあくびをなした子煩悩 好郎
くつしやみを残して帰るもい風呂 美房
赤ちやんが無事に育つて来たくしやみ 柳志

席題「腕組み」

吉田圭井堂選

腕組んで待つ間も土俵考える 専翁
腕組みを先ずしてストはデモリ出し 吉太郎
紹介の名刺見直し腕を組み 柳女
腕組みをして会談のはかどらず 柳志
限界をさとしたらしい腕を組み 柳志
腕組みの相手毎日かわって居 みさ子
腕組んだままことりともさせず 庸佑
腕組んで聞く貫録へ負けていず 白彦子
腕組みの女出揃うもの凄さ 専翁
決断に遠しはしの腕を組み 進之助
この恋をはなさぬ腕を組み 美房
男い者同志でかく腕を組み 舟遊
腕組みになれて二人の恋進み かつみ
腕組みの無策へ妻の機智となり 舟遊
腕組みへ妻は一本つけてくれ 好郎
宿題におやじ腕組みしたまんま 静馬
両腕をデカに組まれて度胸きめ 南宗
腕組んで黙っていたらボスにされ 静馬
腕組みは内野の守備にあるやみ 玲人
腕組んで母の歩巾に坂を降り 天樹
序二段も横綱並みに腕を組み 摩天郎
春闘に鉢巻もめ腕も組み 圭井堂

席題「魅力」

河相すむ選

金だけが魅力チグハグな恋 花梢
許されぬ恋で魅力がつきまとい かつみ

魅力まだ自信の程を肌に移め 滋雀

肉体美女盛りという魅力 進之助

株買うて儲かる魅力待ち 続き いさむ

肺ガンと別に煙草にある魅力 舟遊

インド仏男女抱き合うのになかり 天樹

浮気だけしない夫にある魅力 南宗

指に丸これが魅力という女将 進之助

魅力などないはと女すねて見る かつみ

変人にどこが魅力か友が寄る トメ子

団体にネオンの街が魅力らし 静馬

質よりも安くてかきがある魅力 庸佑

平凡な暮らしに魅力感じて居 みさ子

ふり向けば女の魅力をこになし かつみ

魅力まだどこかにあつてかわれる 圭井堂

女子大の魅力が失せた昨日今日 圭井堂

その髪が魅力だったに倦怠期 薫風子

死にかけた山へ今年も行く魅力 柳志

何魅力あるのか仏鼻がない 天樹

人格が魅力男に男惚れ 文秋

ナイターの魅力母には芝生だけ 清人

矢がすりの魅力明治とともに失せ 圭井堂

未亡人とう名を世間はとくかず 瓢太

席題「ハンサム」

傍島静馬選

古稀過ぎてなおハンサムを自認する 薫風子

ハンサムなボリス部長にまたにり 圭井堂

ハンサムな妻の苦労がまだ 舟遊

ハンサムな男の顔にきずのあと いさむ

ハンサムの自認良縁また逃し 進之助

ライバルがハンサムうかうかしておれず 水京

ハンサムな歌手へ気狂い沙汰の声 清子

ハンサムな女に女を寄せてす 南宗

ハンサムへママの声は透き通り 玲人

ハンサムの課長で噂立ち通し 清子

ハンサムを売物にするキザな奴 すみれ

ハンサムな昔もあつたハゲて来た 瓢太

ハンサムと背中で聞きたい気持ち 滋雀

見合い擦れしたハンサムと見抜かれる 圭井堂

ハンサムが全国手配へ顔ならべ 好郎

ハンサムな金に金持ってます すみれ

ハンサムな金に金持ってます 水京

ハンサムな感じを頼りなく見られ 白彦子

ハンサムを犬の替りに連れ歩き 南宗

ハンサムな寮に帰ればザコ寝なり 喜雄

ハンサムな方のボリスに道をきき 美房

ハンサムのシャツ一枚を買いしがり 静馬

維阿倍野支部句会（大阪市）

金井文秋報

ご本山二世は拝む真似もせず 圭井堂

二号には逃げられ本妻に放り出され 梅里

トルコ風呂社員を叱る顔でなし 柳志

そんな手は古いと鼻声あしらわれ 好郎

大吉の運をかついでパチンコ屋 洋敏

凶のくじ社前の松が引き受ける 野菜

トルコ嬢客を見分けたマツサイジ 柳宏子

鼻声を本気でほんぼんといつめ 静馬

二号さんの猫でねずみもよう 取らず 文秋

トルコ風呂老の頑固をもほくし 東天紅

おみくじに心のすきを覗かれる 小松園

トルコ嬢こそはいとこ手がすべり 一栄

おみくじに決心ついた勤め口 専翁

二の舞の現場巡査は寒う立ち 文蝶

二枚目のよさは堅気の恋をさけ 生薑

二枚目の流す魅力に客が酔い 又菜

男にはこりた筈だに燃える肌 美房

二枚目の昔をしのぶ品があり 幸雄

宿出れば二世を契つた顔でなし 白柳

片腕をかるに二世の小さすぎ 弥生

二の舞を踏むなにか妥協せぬ若さ 有子

風邪引きを鼻声証明して出勤 清子

二号とはホームランの事かと坊やい 嘉代子

おみくじを引いてもやもはれて来る 恒明

二枚目は切れず死なずラブシーン 万里

喜寿にしてまだ二枚目の役をもち 一三夫

二の舞にならぬ意見のくだいこと 南宗

リベートは二号の家へ届けさせ 玲人

ご近所の口は二号にしてしまひ 庸佑

二の舞を予期したように後でいい 藤内

仲居さん二号とは言わず通いなり 喜仙

妾宅はどこで知ったか記者が待ち 宗義

二枚目にはれてネオンのかけで生き すみれ

維玉造支部句会（大阪市）

西出一栄報

出雲屋が持てば素直なうなぎなり 柳志

要心に鍵かけたのへ突っ張りし 井平

中卒の鼻息職安まで荒らし 一栄

鼻息が開票につれて怪しなり 城東

儲け頭の鼻息に当てられる 恒明

鼻息荒らさブームに乗った顔 柳宏子

三代の御代に生き抜き喜寿の宴 水京

壮年流いで喜寿をよろこばず 正彦

喜寿の宴あやかる酒を派手に酌き 六竜子

喜寿祝う孫に曾孫の勢揃い 清子

喜寿をまだカラシヤとして戸主の席 文秋

二次会の会費があとで目をむくす
 生 産
 八 郎
 野 菜
 白 柳
 風 仙
 句 楽
 子 を だ し に お 好 み 焼 の い す に か け
 国 雄
 ザーマスもお好み焼屋のすみにおり
 あいき
 平凡な倅とお好み焼の湯気市郎
 重恵に善意の若い血を捧げ義介
 あはやなと又笑われている善意有子
 これしきの善意カメラへ立たされる天眞
 釜が崎善意がつかぬ助け合い半月

京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

忙しきは猛火の跡にある金庫啞雀
 妬心いま猛火に耐える糸切齒和三郎
 貫らぬいた心作業衣壁にあり尚平
 遂に貫けたトンネルの間に握手している鳥雀
 誰がとおって何かに勝つてると司郎
 わが影を見る眼貫くことにする豊次
 嘘ついて生きる身持をかなしとす極堂
 アバードに住み身持の城となる枯粒
 淀屋橋よどやの話して渡るゆきら
 君の名は梅子を橋で待つ寒さ真砂
 つり橋でいやなやつが手を引かれ句楽坊

備前支部句会 (岡山県)

横山一声報

花札の松がとけ合う青だたみ伊久野

新築の家の一間の古だたみ静子
 畳米の強さに後つぐ子がおしけ三六
 下駄箱に母の形見のたたみ下駄美枝子
 職人もぞうりをぬいだ青だたみ正洲
 うたた寝のよだれがたれているたみ久米雄
 税務署へたたみの数がごまかせず芳月
 寝正月たたみの破れが気にかかり幸仙
 大掃除ほろのたたみを大事がり賤女
 たたみ職ひじの固さを自慢する宗義
 焼はこの出来たたみが気にかかり水仙
 青畳匂う新居へかしこまり胡風
 洋風に建ててもたたみの間を作り一声
 冬の陽のたたみゆつくり陽が延びる汀子
 青だたみもう花嫁を待つばかりのぶ子
 お目出度いことがあるのか畳替え照路
 わびしさは三畳ぐらしの独身者千秋
 極道へ畳がなつた強意見計
 日本へ帰りたいたみの匂いかぐ東岸
 すし話へまだまだ乗せる田舎バス良江
 教室の恋鉛筆を借りた仲秋月

木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

表情がくずれてもとの人となり多津朗
 泣きまいる表情へこみ上げる昌
 表情は思言葉を目で知らせ敏明
 表情がほぐれ仲人ほつとする明朗
 赤ちゃんも一人生めと駄々をこね勇
 肺がんの記事へにわかにパイプ売れ政吉
 赤ちゃんを生んで嫁の盛強うなり政吉
 葬儀屋が表情交らぬ悔み述べ勇
 赤ちゃんが欲しいと妻も本気なり明朗

赤ちゃんが待つ乳の張る共嫁ぎ昌

岡山支部句会 (岡山県)

浜田久米雄報

どう見てもニキビ同志の淡い恋鮫虎狼
 にきびとりの葉つけたに更に増え佐加恵
 かと言つて面もかわれずにはきびら秋月
 大写しスターのにきびテレビで見柳五郎
 子供供はなつとニキビの娘の口尖る秋月
 愛嬌が却つてふえるにきび面三六
 きよう又ニキビをつぶすにきびあり鼓山
 口だけが違者になったニキビ面哲郎
 ニキビ面一人前の口をきき紫峯
 絆創膏貼つたにきびを冷やかせられ胡風
 大発見したよにきび見つけれ幽谷
 にきび面母は見あげて叱つたり三平
 スクリーンの女優のにきびを映り佐加恵
 母親にまだ甘えてるにきび面柳五郎
 にきびがもう出なくなつた売れ残り照路
 娘のにきびババ内心は気にして居三六
 声変り待つてたように出たにきび鈴ん坊
 会うたびに増えるにきびが気にかかり三六
 健康な素顔にきびのある色気照路
 気にすなと教師も言つていたにきび秋月
 ホルモンの棄て場に困つてにきび幽谷
 若後家のにきびに側が放つとけす照路
 トンチヤンのにきびをだした四十面照路
 ニキビ取りつけて男を追ひ回し幽谷
 四十代のにきび散髪屋がつぶし久米雄

下関支部句会 (下関市)

石川侃流洞報

熱燭が今日のさきを吹きとばし一平
 熱燭で一盃お前も温くもるよ千里
 熱燭も冷めて下戸には魅力なし詩酔痴
 熱燭になるひまもない急ピッチ蘇人
 風邪らしい熱燭早々に床をとり寿々
 燭冷めを熱燭にして座をつなぎ蘇生
 熱燭で一ぱい欲しい吹雪道ふき子
 熱燭に今日の疲れをいたわられ蘇生
 熱燭が待てる我が家へ急ぐ足寿々
 温る好きの気嫌ねこつすり栓を開け藤四郎
 熱燭がをまのまのまの強いられる詩酔痴
 熱燭が来たと上手にすすめられ吐泉
 風邪らしいとは怒しい父わち母哲沈
 いい匂い熱燭恋しい屋台の灯千里
 湯豆腐に熱燭もよし友来る九呂平
 残業へ妻熱燭を心得える藤四郎
 仲直りさす仲裁の熱い燭呉浪
 熱かんでベースが狂った二日酔弘道
 熱かんの勢い吹雪を突いて出る吐泉
 下戸に燭させれば酒は煮えかあり蘇人
 熱かんでピッチ幹事は安く上げ弘道
 熱かんの加減も二十五年添い呉浪
 熱かんにしておしまいの酒が来る蘇人
 雑草に似て熱燭で足りる風邪侃流洞

宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花報

うぬれて買った下着が身に合わず月想
 交通禍のニキス下着を寄せる東村
 屋上の干し場下着が派手にはねしげる
 下着にはおしい模様長じゆばん羊歳

倦怠期下着の色をかえて見る 盤茶
はみ出した下着が痴漢をそのかし ます子
湯治場で女房下着に氣を使い 百歩
ニユー・ウツ下着の方にグチをつけ 福子
下心あつて下着をちらつかせ てる子
物干しの下着も盛り場らしい色 実男
女子寮で下着を春の風がなで 頼子
奥さんの下着が祭りにかり出され 羊歳
年頃の下着は陰の風に干し 弘道
下着まで着替えて見合の氣がはずみ 六花

川維 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

二十年前の戦友と飲みあかし 呑洋
掛軸を読まれ珍客御氣に入り 松竜
珍客に孫の自慢から先ずはじめ 勝子
珍客は案外多彩な夢に燃え 天花
時間など言うなと珍客酔わされる 夢生
珍客に妻は不馴れな標準語 窓月
珍客に泣く子もだまるあわてよう 利子
珍客は妻が彼女のころの友 斐山
年の瀬にすられた金にある未練 遊子
捨てた金未練の残る二三日 波浪
金にだけ未練が残る恋の末 美知
未練とは別に子供にひかされる 勝喜
やりくりを癒す酒とはみてくれず 婦蛇
讚美歌で救えるものと耐に酔い 寛
追憶を拾うよ落葉の道ゆけば 紅雨
火葬も正月五日までをため 松風
几帳面に薬をのんで酒やまず 康之介

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

森下愛論報

父ちゃん日記は呑んだことばかり 竹青
逃亡へ日記が燃えぬもどかしさ 好治
子の日記挿れた鼠をあわれがり 春巢
数の子の値にふれては主婦日記 風仙洞
古日記妻にもあった恋の記事 よしを
何度目の禁酒か日記繰って見る ひらく
ツイストの足ももつれる片思い 静峯
我が思い君に通わず旅に出る 文子
片思い歌に託して便りかき 弥久
アルバムに写真だけある片思 ハナ子
告白し片思いだったと知った今 かをり
スキー帰り春衣をのぞく飾り窓 春雄
一文銭がまだ生きていた古日記 草右
春衣つけれどナースの匂する 愛論
赤ちもちゃん春衣チヨコくはい出した 没食子

杏林川柳句会 (大阪市)

中島生々庵報

商魂が秋の夜長にねばりぬき 生々庵
理性きびくまともに俺の老いを知る 同
御焼香し乍ら順序が氣にくわず 野迷路
三猿坊近く
散る紅葉残る紅葉が送ってる 同
若がついていてもレンズに見破られ 阿茶
倦いて来た二男を妻が可愛がり 同
たのしさも淋しさもある好奇心 太希志

要人狙撃好奇心では済まされず 一哲
ふるりの夜長惜しんで涙みかわし 同

コクヨ川柳会 (大阪市)

川口理休報

気がつけば出世街道をれており 瑤己
また番狂わせに兩男やつて来た 如左吉
出世などどうでもいいと社長の子 昭一
出世はしたが手かせ足かせさるくつわ 武彦
アリバイを持たぬ善人おどおし 広彦
違反だけしなや免許の子を案じ 理休
「禁煙」の文字もうもつとみおき ぼたる

丸紅川柳会 (大阪市)

村田瓢太報

民警協力丹前のまま撮される 裕児
丹前の柄で土産屋宿を当て 瓢太
国寶も丹前を着て上気嫌 一代
停年が来て丹前の背がまるい 泉陸
戸口まで子供がすんでいる車 立児
免許証取って自動車まだ買えず 巴子
運転手お客も氣になるバツクミラー 一代
試験落ちたので名神ふつ飛ばし 泉睦
乳母車で始まり霊柩車で了る 瓢太
希望？フンとチンピラクラス干し 立児
日めくりの厚さに比例する希望 巴子
希望もてと何やら判らぬ訓示 睦子
子に持たす丹当親の見栄を入れ みゆき

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区源蔵町5 (361)9373代

支局 東京都千代田区神田蔵町2 (291)9629代

名古屋市昭和区村田町2 (88)9069

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

オトイレの案内もしてる交通社 摩天郎
交通社甘い言葉に聞きあきて 圭水
交通社机と電話資本にし 句念坊
交通社も幹事の苦勞知っている 圭水
交通社もバンフレットを信じ切り 同
交通社で聞けば日本も狭いとこ 和郎
金と暇あるのがうらやまし交通社 圭水
交通社僕も行きたいこの「コース」 鳥莊
又旅行する氣にもさせ交通社 圭水
交通社つれの女をもう見抜き 和郎
駆け落ちも導いていた交通社 専翁
交通社なんぼかろうと社用族 八郎
交通社自分は旅する暇もなく 圭水
交通社もう広告ば花ざかり 和郎
交通社型にはまった旅行さし 圭水
交通社テープにしたいほど聞かれ 同

そこまでは知らぬと言いたい 交通社 路郎

あすなる川柳会 (大阪市)

山本素郎報

安あがりぼちぼち雨がもりはじめ 好郎
梅見頃南紀へ来いと湯のたより 梅里
出来栄えのよい子も落ちる狭き門 醉泉
あわや正体がとうとうこころマーシャル 福郎
人世悲喜ありと後悔なげ捨てる 尤三
小舟なるわが身漕ぎ出す波遙か 水邦
社内結婚ディパーテイで安くあげ しげ子
安あがり口説きおとして高うつき 百酒
墨染の尼僧にからむ梅の花 一枝
清潔な媚三百年の梅の花 恵美子
後悔をすかすか雨は降り 信重
お土産がかえり隣りの子をかえし 慶之助
武家屋敷名残りとおめる梅の花 ゆきを
羊羹の中にも咲いた梅の花 キヨ
表彰というデで安くこき使ひ 素郎

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

方便のうそがとつきに間に合わず 青米
ベテランは被害者のそにさからわす 美房
二日酔女の顔がチラチラし 静林庵
二日酔葉はないよとはとつとかれ 花梢
二日酔妻にはすまぬうそをつき 一栄
銀行は鬼と仏に使い分け 呑天
鬼は外高利貸も豆をまき 美代
鬼のような女房で一生つつがなく 吉太郎

明和川柳研究会 (西宮市)

樋口舟遊報

心の鬼福豆ぐらいで追い出せず 好郎
雪よりも酒に未練な雪の宴 米更米
名にし負うこころ札幌の雪まつり 半月
あこがれのスキータンカで帰って来 すみれ
雪やこんこ悲し童歌の残る町 摩太郎
雪の様に白のお肌とおだてられ 清子
かす汁はほろよい気分になしてくれ 菊代
かす汁にありついて来たもらい風呂 東雲桜
十二月歯痛がこらえ切れずなり 牧人
十二月風邪は病のうちでなし 夢虹
鶏舎煙々産卵を急かされる 新子
頑として花街に足袋の老舗守る 静馬
喜へ足に馴味まぬ足袋を穿く 千尋
波白く騒わき椿は紅く咲き 生薑
一輪さしの椿にものを言うひとり 鮎美
鮮やかな色で椿がふまれて居 正祐
東京の風がつめたい島椿 蝶花
ローカル線無人の駅に実椿 木村
駅前の椿が咲けば実くなり 輝尾
椿差さばボトリと落ちん髪ばかり 修児
椿咲く踊り子の旅つづくなり 舟遊
椿墮つ思いを断てと言う如し 薫風子
最近のうどんなはそばに似て細し あきら
信濃路はよし月をはめそばをはめ 是るを
国食し山の上までそばの花 芳助
郷愁に似たりひなびたそばの味 すすむ
へんこつそやけどうまい手打ちそば 泰
年寄りの為に一畝だけの蕎麦 山友

雑音のない図書館の椅子がよし 万葉
雑音を聞き流す程人物が出来 永幸
老婆の口にはかたいボタン 鯛三舟
生活のなかにも生と死とがある 草人
曲乗りのようなコースをパス走る 半歩
下戸のくせ一升瓶を抱いて撮り 清二
里の母ラッシユ最中の駅へ降り 言也
ふるさとの母校交らずじつと見る 正雪
老婆のこの頃少し色つぼし 梅志
大阪府にも山奥がある能勢の風呂 太路

○

南天の実がむしられた鬼の目 牧人
くやしくて鬼真赤に目をほらし 天樹
見つめれば人なつこい鬼の目 郁三
試験台に鬼きよとんと蘇えり 言也
身じたくも出来て鏡へもう一度 行人
初鏡吾が老醜を悟ったり 大丘子
事故をした駅はミラーに聞いてくれ 弦月
鏡の中の顔を女は別に持つ 薫風子
日曜のあてがまだない姫鏡 万葉
草原がひとりへ続く夢の中 和三郎
駿馬いなく草原のちぎれ雲 正司
草原の緑に山羊の白があり 三舟
開拓の夢草原を馬車が行く 曙蝶
子等の書く草原貨車の行くところ 九州男
せんき好きな男が持つて来た噂 正薑
ぬくい日を選つて気ままな 初詣うで 静馬
みかんころころ伴せな手が温し 鮎美
青年の勇氣老婆に席をあけ 金之助
草原の枯れてみじかき陽へくる 舟遊
瓦焼く竈へ不運な松が待ち すすむ

ミレーの絵を偲ぶ草原陽が沈み 太路

諫早川柳会 (諫早市)

川岡露眼子報

予算まで水増しにして降りつつき 重幸
長雨が刃物に見えてくる生活 重信
口だけは困った雨だと傘屋言い 嘉象
ニコソに長雨続く物価高 万象
長雨も晴れて雲間に日の光 随心
テルボーズふそ長雨やつとやみ 薫風
長雨におびえる土地を捨てき 重信
今日あたり晴れてくれそうな照坊主 露眼子
お茶漬の味は番茶で生きてくる 実
番茶つぐ母の苦勞の指太く 茶人
針の手をやめてぬるみし番茶のむ 茶坊
先立ちし妻を今更ら好きになり 晴紫朗
長雨に農家が野菜を買いに来る 嘉象
氣象台予報し難き長い雨 筆染
長雨に靴ぬだれる母にして 敏男
長雨に計算外の溝あふれ 螢子

宴会・出張パーティ・折詰弁当

梅里ノ店

大萬

料亭

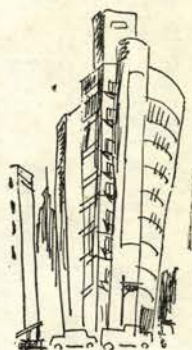
飯の店

串の店

阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL (三三) 三九三五番
アベノ橋近地下食通街
TEL (三三) 〇一四七番
南区豊屋町三ツ寺センター
TEL (三三) 九一八四番

編集室

路 郎 生



★春うららも結構だし花だよりもOKと言いたい、川柳の創作には赤信号を出したい。飲んで騒いで凡人化は川柳の敵である。

★逐号好評なので編集局は気をよくしている。これも一つに寄稿家諸氏の支援と愛読諸君の支持のたまものだと感謝している。

★老生も元氣だ元氣だと言われているが、意気は今なお衰えぬにしても、体力がこれに伴わぬことを知りはじめたので、昨一カ年は老兵如何に消ゆべきかを深慮していた。たとえ予備軍に投ずるとしても、柳界のためにも、又自分の川柳生活の締めくくりにためにも書きたいものの多くがあるので、ここで何とかしなければならぬと考えていたが、それ

にしても最後のガン張りには必要なので、今回は更に編集局の強化を図る事にし、別欄「社の黒板」の如く、「現代川柳への理解」の著者河野春三氏を編集局に迎え、先ず若い柳人達の喝望に應えることとした。

★各界とも、明治、大正、昭和に活躍して来た人たちが、惜しまれながらも斯界から姿を消してゆかれるが、このことは川柳界にとっても例外ではないので、今なお余命を保っている私たちの責任の重大さを痛感している次第だ。諸君よ、お互いにいのちある句を遺そうではないか。

川柳支部句会
——四月——

★玉造句会・10日(金)六時半、題、迷い子・騒ぎ・跡始末・所、市

電玉造南百米大阪信用金庫。

★阿倍野句会・20日(月)六時、題、四面楚歌・コース・都合・程、所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割烹大万。

★明和研究句会・12日(日)一時、題、夕桜・観念・糸所、阪神電車鳴尾駅東南二百米鳴尾公民館。

★南海電鉄句

会16日(木)六時、題、白バイ・やり直し・小包。

★京都支部句会16日(木)夕、題、落丁・応援・鰻、所、四条繩手仲源寺。

川柳雑誌社主催 本社四月句会

最も美しいこと
最も近代的なこと
最もご便利なこと
ハンシンは
皆様の百貨店です



大阪梅田・水曜定休
阪神
電361-1201(大代表)

日時 四月七日(火)午後六時

会場 自安寺(妙見さん)電話 四一四七八番
南区千日前電停東スグ北側

兼題 「度」三句 西尾 榮選

「人」三句 若本多久志選

「よそ目」三句 吉田圭井堂選

「仮縫い」三句 橋高薫風子選

三題 当日発表

席 生 路 郎

呈 賞 話 題

會 費 百円

★投句だけの方は郵券三十円封入

(切は四月五日) 本宛電。

川柳雑誌社句会部

電・大阪 六〇八一

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

曲り角 (十句以内) 友洲 貴山 選

混り浴 (十句以内) 後藤 梅志 選

まきぞえ (十句以内) 小西 雄々 選

盛 明 (十句以内) 浜田 久米雄 選

座 布 団 (十句以内) 山 真鍋一瓢 選

近作柳 每号募集 (柳十句以内) 麻生 路郎 選

川 生 譜 (柳十句以内) 北川 春葉 選

文 柳 塔 (柳十句以内) 河野 春三 選

章 (評論・研究・感想其他) (毎月十五日締切)

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼「近作柳」は一般作家の雑吟を募る。

▼「課題吟」「人生譜」は誰でも投句が出る。

▼「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行

川柳雑誌 第三十九年 第四号

定価 一〇〇円 (送料六円)

(禁転載) 半力年 七五六円(年刊)

昭和三十三年四月一日印刷

昭和三十三年四月一日発行

大阪市住吉区西五丁目二五番地

編集長 麻生 幸二 郎

印刷所 川柳雑誌社

大阪市住吉区西五丁目二五番地

電話 大阪 六七一六〇八一

郵政 大阪 七五〇五〇番

発行所 川柳雑誌社



アスパラ



こんな時こそアスパラを

- 疲れ易い時 疲れた時
 - 心臓が悪い時
 - 肝臓が弱っている時
 - 神経痛・筋肉痛・二日酔
 - 疲れ目・手足の脱力感
- 六〇錠三〇〇円 一〇〇錠五〇〇円
三〇〇錠一、一〇〇円
アンブル二〇円 ドリンク二〇円

麻生路郎 著

好評噴々

川柳雑詠

価二五〇円
送費八〇円
B6版
二五〇余頁

川柳の味い方・五百数十句

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう六十余年にもなる。この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑詠」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

大坂市住吉区西五丁目二五番地
發行所 川柳雑詠社
電話 大阪六七一六〇八一
新井口屋 大坂 七五〇五〇

麻生路郎先生著

川柳とは何か

価二五〇円
送費七〇円

川柳の作り方と味い方

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたものが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味い方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑詠社

至文堂

東京都新宿区払方町27 板替東京29507

倉敷紡績

洗う...
乾く...
すぐ着られる

東レテロン 65%
高 級 綿 35%

クラブウ テロン シャツ

姉妹品 クラブウテロンブラウス

昭和廿一年七月一日 第三種郵便物認可
昭和廿九年四月一日発行 (毎月一回一日発行)

編集者 川柳雑誌社

発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区西本町五丁目二番地

電話大阪(671)六〇八一

正価百二十円 (送料六円)

郵政省認可 大阪七五〇五〇番

正価百二十円 (送料六円)

主催 朝日新聞社 みんなびっくり

あやめ池 マジックフェア

いま開催中6月7日まで



スバ抜けて楽しいマジックフェア 春のレクリエーションは 花の遊園地 あやめ池へ.....

スリルとユーモアをたっぷりもりこんだふしぎの世界 マジックホール・日本歌劇団の春のおどり・グランドマジックショー連日公演
日曜祝日には野外劇場で豪華アトラクションの開演
最新式遊戯具のそろったあやめ池は 花さくパラダイス
入場料...歌劇もアトラクションもマジックホールも全部見られて150円こども80円

大阪上本町から奈良ゆき急行で30分 日曜は奈良ゆき特急で23分 片道90円 京都から奈良ゆき特急で30分西大寺駅のりかえすぐ 片道125円

近鉄 あやめ池遊園地

貫禄は充分です

樽で貯蔵しはじめてから40年...

まろやかな味!

ふくやかな香り!

すべてが完璧なウイスキーです

サントリー



ローヤル、000オールド、1200、
瓶、1000、白、札、七五、
角

サントリー

世界の名酒

一番よい酒

うまい酒



菊正宗

清酒

宮内庁御用達

林式会社 本嘉納商店

神戸・灘・御影